



Until we are all equal

危機下の 思春期の女の子

ウクライナ、ポーランド、
ルーマニアからの声

調査報告書

2024年6月

プラン・インターナショナル

目次

1. はじめに	3
1.1 危機の背景	4
1.2 調査項目と目的	5
1.3 調査方法	6
1.4 倫理とセーフガーディング	7
1.5 制約事項	7
2. 調査結果	8
2.1 メンタルヘルスとウェルビーイング	9
2.2 安全と暴力からの保護	18
2.3 教育	25
2.4 SRHR	29
2.5 思春期の若者とジェンダー規範	34
2.6 思春期の若者の参加	37
2.7 未来へのビジョン	40
3. 結論と提言	42
3.1 結論	42
3.2 提言	43
巻末資料	46

略語集

AGiC	危機下の思春期の女の子
CSE	包括的性教育
CSO	市民社会組織
EU	欧州連合
FGDs	フォーカス・グループ・ディスカッション
GBV	ジェンダーに基づく暴力
IDPs	国内避難民
KII	主要情報提供者インタビュー
LGBTIQ+	レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックス、クィア+
MER	監視、評価、調査
MHPSS	メンタルヘルスおよび心理社会的支援
I/NGO	国際非政府組織
ODI	海外開発研究所
OHCHR	国連人権高等弁務官事務所
PTSD	心的外傷後ストレス障害
SRHR	性と生殖に関する健康と権利

本報告書で使用している名前は全て仮名である。本調査中に写真は撮影していない。本報告書の写真に登場する女の子は、調査に参加した女の子とは異なる。

1. はじめに

ウクライナで進行中の危機を思春期の女の子がどう経験し、乗り越えているのかを理解することは、人道支援部門が彼女たちの懸念に対処し、彼女たちの能力を向上させる上で、彼女たちとパートナーを組むための土台となる。

本報告書は、この理解の促進を目指すものであり、思春期の女の子にとって不安な分野に焦点を当てるだけでなく、彼女たちがその状況にどう対応し、そして自身と周囲の人びとにとってより安全で、より包摂的な社会を目指すかという点にも焦点を当てている。



Katy, 16歳、ブカレスト駅でハンガリー行き列車を待つ。

写真クレジット: George Calin© Plan International

1.1 危機の背景

ウクライナでの紛争激化から2年後の2024年¹、国連は1,460万人(同国人口の40%)が国境内で人道支援を必要としていると推定している²。ウクライナでは400万人近くが国内避難民(IDPs)となっている。

2024年2月、国連ウクライナ人権監視団は、2022年2月³以降、3万457人の民間人犠牲者が確認されたと報告した。これには1,885人の子どもの犠牲者が含まれ、内、587人が死亡、1,298人が負傷した⁴。

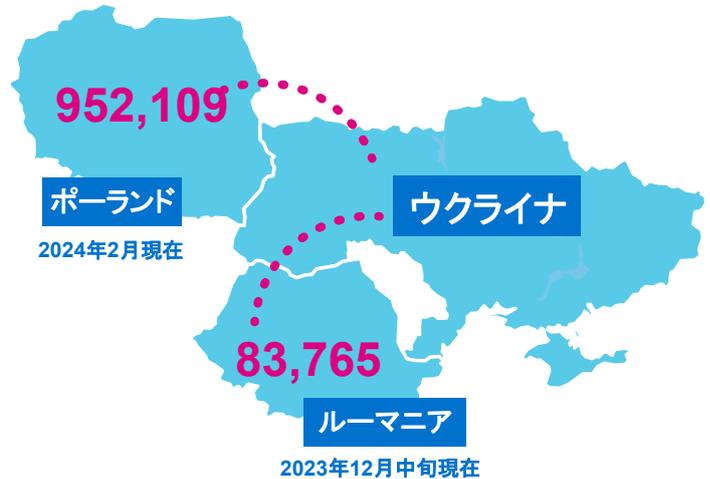
紛争の激化により、数百万人のウクライナ人が他国への避難を余儀なくされ、シリア、アフガニスタンからの難民に次ぐ世界第3位の難民人口となっている⁵。2022年には、ウクライナ難民の多くがポーランド、モルドバ、ルーマニア、チェコ共和国、ハンガリー、スロバキアなどの近隣諸国に避難した⁶。2023年、ヨーロッパで登録されたウクライナからの難民の数は増加し、ドイツには100万人超が居住している⁷。また、ヨーロッパ以外、主にカナダとアメリカで登録された難民の数も増加している⁸。ウクライナからの難民の大半は女性、女の子、男の子である⁹。戒厳令の施行により、18~60歳の男性はウクライナからの出国が制限されている¹⁰。

難民高等弁務官事務所 (UNHCR) は2024年1月、ウクライナからの難民の81%が、生計、医療、住居、十分な食料へのアクセスなど、少なくとも1つの重大なニーズの未達成を経験していると報告した¹³。難民を受け入れているコミュニティのリソースの不足に加え、言葉の壁や支援サービスに関する情報へのアクセスの制限など、複合的な要因がこうしたニーズの未達成を引き起こしている¹⁴。メンタルヘルス面での危機が同時に、ウクライナの内外で紛争の影響を受けた人びとの間で明らかになってきている。子どもやユースの4分の3(75%)が、暴力に長期間さらされ、普段の生活が妨げられているため、心理社会的支援の必要性を訴えている¹⁵。

プラン・インターナショナルのウクライナ対応

2022年以来、プラン・インターナショナルは、ウクライナ、モルドバ、ポーランド、ルーマニアにて、2022年2月の紛争激化に伴う人道的危機に対するパートナー主導の対応に取り組んできた。これまでにプラン・インターナショナルは、14万9,000人の女の子と11万人の男の子を含む約65万人の参加者を支援し、49の現地パートナーと協力してきた。

一時保護下にあるウクライナからの
難民登録者



ウクライナからの難民世帯の約44%が、2024年初めには少なくとも1人の学齢期の子どもが地元の教育システムに登録されていないと報告している。

こうした子どもや思春期の若者は、COVID-19パンデミックによる2年間を加えると、2024年9月には4学年度にわたって教育が妨げられることになる¹⁶。ウクライナ国内では、3,798棟の教育施設が被害を受け、365が完全に破壊されて17、2,300校以上が安全上の理由から閉鎖されたままである。生徒の半数近くがオンラインまたはハイブリッド教育を利用しており¹⁸、推定4万人の教員が、このような教育を行うための支援を必要としている¹⁹。

1.2 調査項目と目的

この調査は、ウクライナ危機の影響下にある思春期の女の子やユースの声を増幅させようとするものである。彼らが最も重要だと考える問題についての視点を提示し、思春期にいかに関与を乗り越えていくのか、その違いを理解することを目的としている。

本報告書は、**思春期の女の子自身**が、これらの主要な利害関係者が行動を起こす必要があると**考えること**について、**調査結果**とドナー、実務者、政策立案者への**提言**を示している。

これらの目的を追求するため、以下の主要な調査項目が用いられた。

- 1 紛争激化以来、ウクライナ、ポーランド、ルーマニアで、10～19歳の思春期の女の子やユースはどう不安な体験をしてきたのか
- 2 思春期の女の子やユースは、自身が置かれている人生の段階をどう定義し、経験しており、彼らが経験している危機がそれにどう影響を与えていると感じているのだろうか
- 3 思春期の女の子やユースは、自身の生活に影響を及ぼしている安全保障、社会経済、文化的な問題にどう参加・動員しているのか
- 4 ウクライナの平和で包摂的な未来のために、思春期の女の子やユースはどんなビジョンを描いているのか。彼らは復興においてどんな問題を優先し、その過程で自らをどう位置づけているのか。



Olena、21歳、ルーマニアのユースセンターでロボット工学の授業中、ウクライナの女の子を助ける。

写真クレジット: Andreea Câmpeanu © Plan International

1.3 調査方法

この調査では、人道支援において見過ごされがちな紛争のジェンダー的な影響だけでなく、この危機を経験している思春期の若者の社会生態学的環境を探るため、質的な参加型アプローチを用いた。

危機下の思春期の女の子 (AGiC) の手法

本AGiC報告書は、南スーダン、バングラデシュのcockspazal、チャド湖、サヘル地域、ベイルート、中米、メキシコ、南米の状況を調査した、一連の大規模な **調査の一環** として行われたものである。この一連の調査では、危機が思春期の女の子に与える特有の影響、女の子がどう不安を経験し、乗り越えていくのか、思春期の女の子特有のニーズ、危機的状況にある女の子を支援する機会などについて調査している。本報告書は、危機的状況における思春期の女の子特有の脆弱性と、彼女たちのレジリエンス、対処戦略、そして危機への対応能力を証明した、これまでのAGiCの調査に基づいている。

1.3.1 調査デザイン

ウクライナのキーウ・モヒラ・アカデミーの社会科学専攻の学生の意見を取り入れながら、調査対象3カ国の包括的なデスクレビューを実施した。各調査国の15~19歳の女の子を対象とした設計ワークショップを開催し、参加者からデータ収集ツールに対するフィードバックと提案を得た。最終的な研究手法は、世界情勢シンクタンク海外開発研究所(ODI)の研究倫理委員会に提出され、審査を受けた。一次データ収集ツールは、ウクライナ、ポーランド、ルーマニアの現地研究者の研修の際に翻訳され、更に文脈が整理された。

1.3.2 データ収集

本報告書は、2023年8~10月に行われた以下の集団とのフォーカス・グループ・ディスカッション(FGD)とインタビューを通じて収集されたデータを使用している。

257人

の思春期の女の子、男の子、そしてその保護者、危機に対応する主要な関係者

135人 のウクライナ在住・出身の 女の子...

67人

10~14歳

68人

15~19歳

36人の男の子

18人

10~14歳

18人

15~19歳

30人の思春期の若者の保護者

32回の反省的FGD

56回の、思春期の女の子と男の子、15人の政府機関代表者、様々なNGO(国際、国内)、コミュニティとボランティアネットワーク、地元の市民社会グループを含む多様な利害関係者との半構造化インタビュー(KII)。

3回の語り部的アプローチを用いた、半構造化インタビューも10~19歳の女の子を対象に実施され、本報告書では事例研究として紹介する。

データ収集と分析の際、思春期の女の子と男の子を2つの年齢層に分けた：10～14歳と15～19歳である。その目的は、思春期の体験における年齢とジェンダーの交差を更に分析するためであった。保護者は、FGD、詳細なインタビュー、語り部活動など、様々な方法で男女混合のグループに参加した。

1.3.3 データ分析

グループディスカッションとインタビューは書き起こし、清書し、匿名化した。データ分析は、ウクライナ語、ロシア語、ポーランド語、ルーマニア語、英語で行われた。暴力からの保護、教育、性と生殖に関する健康と権利 (SRHR)、参加、メンタルヘルスおよび心理社会的支援 (MHPSS)、将来への抱負といった主要なテーマに焦点を当てたAGiCの枠組みを、ジェンダーの視点から分析した。データは、質的分析ソフトウェアDedooseを用いてコード化した。

1.4 倫理とセーフガーディング

プラン・インターナショナルは、ウクライナ、ルーマニア、ポーランドで実施された調査が、子どもと若者のセーフガーディング、倫理的MER (監視、評価、調査) の方針に沿っていることを確認した。調査企画書は、ODIの研究倫理委員会によって審査され、承認された。「傷つけないこと」がこの調査の主要な指導原則であり、これは「質と説明責任に関する中核的人道的基準」とその9つの中心的公約を支持するものであった。調査プロセスへの参加はすべて任意であり、参加者からインフォームド・コンセントと同意 (若年層の参加者) を得た。データ収集の適切な場所と方法の選定を含め、守秘性を確保するための手順が整備された。データ収集者は、プラン・インターナショナルのグローバル保護方針に関する研修を受けた。データ収集プロセスを通じて、各国のセーフガーディング・チームが利用可能であり、フォローアップのサポートが必要な人には、紹介の仕組みとプロセスが用意されていた。

1.5 制約事項

データ収集は現地語で行われ、記録はウクライナ語とロシア語に翻訳された後、英語に翻訳された。この過程で、ニュアンスや意味が失われた可能性がある。ウクライナでのデータ収集は全てオンラインで行ったが²⁰、特に地方の参加者は接続に問題があり、グループ活動への参加に支障をきたす場合があった。このような場合、調査者は参加者に柔軟なスケジュールを提供し、必要に応じてFGDやインタビューのスケジュールを変更した。

ロマの女の子、LGBTIQ+の思春期の若者、障害のある女の子など、思春期の女の子の多様な断面を含めるよう努力した。しかし、ポーランドの調査への参加に関心のある疎外された集団の女の子を見つけることは特に困難であり²¹、紛争の影響を受けた青少年の多様な経験を含めることを制限した。13～14歳の参加者のなかには、15～19歳のグループとディスカッションをすべきと感じたり、10～12歳のグループと一緒に参加してもあまり興味を示さなかったりする者もいた。特に思春期の男の子の間では、SRHRに関する知識や態度を探る質問に答えるのをためらう傾向が見られた。これらの質問は15～19歳の思春期の女の子との協議で作成されたが、設計段階の協議では、すべてのジェンダーと年齢を含むことが有益であったであろう。



2. 調査結果

このセクションでは、安全性と暴力からの保護、メンタルヘルス、教育、SRHR、女の子の参加と活動に関する調査結果を紹介する。最後のセクションでは、女の子の未来とウクライナの未来についてのビジョンを探る。



Kateryna、彼女の母、そして叔母は、今は皆ルーマニアに住んでいる。

写真クレジット: George Calin © Plan International

2.1 メンタルヘルスとウェルビーイング



2.1.1 紛争や移住が思春期の若者に与えるメンタルヘルス上の影響とは

思春期の女の子と男の子は、ウクライナで続いている紛争が、彼らのメンタルヘルスと心理社会的ウェルビーイングにいかにか**壊滅的な影響**を及ぼしているかについて話し合った。避難、家族や友人の喪失、教育やその他の社会的環境の中断といった**感情の動揺**は、全てウクライナ、ポーランド、ルーマニア全土の思春期の若者に多大な影響を及ぼしている。

紛争によるストレスと不安

「夢で爆弾の音が聞こえ、泣きながら目を覚ますと、どこにいるのか一瞬わからなくなるんです」

Mykola、女の子、10-14歳、ウクライナ

「全てうまくいっていると感じることもあるけど、精神的な危機に陥ることもあります。感情の浮き沈みが激しいんだ」

Yuriy、男の子、15-19歳、ポーランド

ロシアとの国境に近いウクライナ第二の都市ハルキウのような、攻撃を受けている地域や最前線にいる思春期の女の子と男の子は、特に彼らの感情的ストレスや対処方法が、常に危険と隣り合わせであることで、大きな影響を受けている。ウクライナの国際NGOや地元市民社会組織(CSO)の職員は、紛争の影響を受けた思春期の若者の不安の高まりを指摘している。持続的なストレスと心配は、悪い出来事の予期とともに、ウクライナの思春期の若者の緊張レベルを著しく高めている。思春期の若者を支援するサービス提供者もまた、彼らの自信、自身の能力に対する信念、明るい未来への希望が顕著に低下していると報告している。

安全を優先するあまり、思春期の女の子と男の子の通常の社会的支援制度の利用は制限されている。オンライン学習、社会的交流の制限、安全対策の強化は、彼らの日常を混乱させ、精神的苦痛を増大させる一因となっている。このような状況での対処には、保護者が強調したように、しばしば心理的援助が必要である。

「私たちはハルキウの最前線に近いので、安全が最優先です。でも、子どもは常にストレスを抱えています。今、心理社会的な支援がとても必要だと本当に思っています」

女性保護者、ウクライナ

難民受け入れ国で暮らす思春期の女の子と男の子の多くは、家族がウクライナに残され、特に保護者が徴兵されたり、攻撃を受けている地域や最前線に残されたりして、一層のストレスと圧力を感じていると報告した。

「ここに来た当初は、とても悲しく、怖かったです。父をウクライナに残してきたから。今でも、いつ父に何か起こるんじゃないかととても怖い。以前のように一緒にいられたらと思います」

Adriana、女の子、10-14歳、ポーランド

思春期の若者と接する職員は、ストレスや不安の結果、年齢による違いがあるものの、女の子に目に見える困難が現れたと報告した。10~14歳の思春期の女の子は、学業やその他の活動に集中することが特に困難であることを指摘した。また、年上の思春期の女の子(15~19歳)は、持続的な緊張やストレス状態が、気分や自信、全体的なウェルビーイング感に影響を及ぼしていることを示した。

「15~19歳の女の子にとって、集中力の欠如は、考えをまとめること、活動や勉強に取り組むこと、気分の落ち込みなど、様々な形で現れる。無気力感や自信のなさを伴うことも多い。

10～14歳は適応しやすいかもしれないが、年齢が上の女の子は、顕著な気分の変動を示すかもしれない」

思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

15～19歳の思春期の女の子は、紛争の激化で破壊された慣れ親しんだ環境や生活習慣への深い憧れを示した。彼女たちはまた、避難と社会生活の中断によって、遠距離の友人関係を維持することが難しくなり、いつ生活や人間関係が元に戻るかわからないという不安も生じていると話した。

紛争の激化は、保護者に更なるストレスを与えている。これは彼らの精神的苦痛を悪化させ、世話をしている思春期の若者の感情的・心理的ニーズを支えることをより困難にしている。

事例研究1: Olesya、ウクライナ

Olesyaは16歳で、LGBTIQ+コミュニティの一員である。故郷を追われ、ウクライナの首都キーウに住んでいる。かつては学校と趣味の日課で満たされていた彼女の生活は、国の紛争により大きく変化した。Olesyaは、常に不安の中で生活していると語った。「今は毎日が予測不可能。次の爆弾がいつ起こるかわかりません」

紛争以前、Olesyaの毎日は、学校、放課後の授業、友人との余暇といった、計画的で予測可能なものだった。しかし、紛争が激化し、爆弾警報が頻繁に鳴るようになると、彼女の生活は遠隔学習と時間外学習にシフトした。「いつもサイレンの音が聞こえるので、学校の授業に集中できません」と彼女は認める。紛争は物理的な危険だけでなく、心理的な問題ももたらした。彼女は、爆弾とそれによる脅威によって高まる不安について語る。「紛争が外だけでなく、頭の中にもあるように感じることがあります」

Olesyaは母親と祖母と同居しているので、安心し、支えられていると感じていると説明した。しかし、ある近親者との複雑な関係が彼女の不安を引き起こし、アイデンティティや自己表現に影響を及ぼしているという。「綱渡りのようなもので、自分らしさと(家族の)期待とのバランスを取ろうとしています」。Olesyaは、ウクライナにおける社会的圧力と伝統的な期待が彼女に重くのしかかっていることを話した。彼女は、彼女の社会に浸透している性差別について、そして紛争がいかに伝統的なジェンダー役割を強化し、彼女の人生に影響を与えているかについて率直に語った。「ウクライナでは、女性、特にLGBTIQ+の女性であることは、多くの前線で戦うことを意味します」。

身体的安全へのリスク、学習の中断、差別、スティグマ、緊張した家族の力関係など、様々な困難の中で、Olesyaは新しい友人の輪に加わることに、キーウのNGOに参加することにやすらぎを見出した。この社会環境の変化は、差別や同性愛嫌悪にさらされた以前の経験とは対照的に、より快適で理解されていると感じる空間を彼女に提供した。「ありのままの自分を受け入れてくれる人々を見つけることは、砂漠の中のオアシスを見つけるようなものでした」。彼女は科学捜査やギター演奏など、自分の興味を追求し続け、状況の変化に適応する方法を見出している。「紛争が私を定義づけることを拒否します。私はこの紛争における統計からこぼれ落ちた存在なのです」。

この変化と挑戦の環境において、Olesyaは積極的にコミュニティに参加し、彼女の信念と価値観に沿った活動を支援している。彼女の未来のビジョンは、勇気と適応力、そして社会変革の追求にある。「誰もが恐れずに自分らしくいられるウクライナを信じています」。

紛争が外だけでなく、頭の中にもあるように感じることがあります



障害のある思春期の若者の不安の高まり

この紛争の影響を受けた障害を持つ思春期の女の子と活動するNGO職員は、社会的排除や、財政的・人的資源の不足を含む専門的支援を提供する制度的能力の限界といった既存の障壁のために、これらの女の子は強いストレスと不安に襲われていると説明した。あるNGOの代表者によると、社会的孤立は紛争中の大きな懸念であり、仲間との有意義なつながりの形成は、社会活動参加の障壁に直面する可能性のある障害のある女の子にとって以前から困難なことであった。紛争により一貫した支援体制、社会的ネットワーク、定期的なセラピー・セッションのような重要なサービスが途絶えることは、全て女の子のメンタルヘルスに悪影響を及ぼす可能性がある。

「障害を持つ思春期の女の子は、安全上のリスクのために、高レベルの不安やストレスといった重大なメンタルヘルス上の問題を体験しています。彼女たちは、大抵、社会的環境から排除され、その結果、孤立しています」

障害のある思春期の若者の支援に取り組む地元CSO、女性、ウクライナ

ウクライナで障害のある思春期の若者と関わる職員は、攻撃を受けている地域や最前線に住む精神障害のある思春期の若者にとって、爆弾や砲撃の音がいかにも不安を煽り、場合によっては深刻なパニックを引き起こしかねないかを強調した。防空壕へのアクセスが難しい身体障害のある思春期の若者は、恐怖感と脆弱性を高めている。

LGBTIQ+の思春期の若者の経験

本調査の参加者は、ウクライナでは同性愛嫌悪やトランスフォビア的な態度が以前からあり、学校や家庭、メディアで差別的な発言を耳にしたと報告している。

「私は英語の先生といい関係です、彼女のお気に入りの生徒の一人みたいなので。でもある日、彼女はLGBTIQ+の人たちは精神疾患があると言ったんです。彼女はソドムとゴモラ*について話し始めました。私はああ、私がそのコミュニティに属していることを知ったらどうなるんだろうと思いました」

Ksenia、LGBTIQ+の女の子、15-19歳、ウクライナ

「自分の性的指向について、同級生や先生など、みんなに話すのはどうかと思う」

Tanya、LGBTIQ+の女の子、15-19歳、ウクライナ

* (訳注)ソドムとゴモラ: 旧約聖書『創世記』に登場する町。享樂的で性的に放埒な生活が根付く『悪徳の町』であったとされ、現在でもキリスト教圏では「墮落した」都市や治安の至極悪い都市などをこの町に喩えることがある。

LGBTIQ+コミュニティの思春期の若者は、紛争が始まる以前に経験した敵意のために、この危機の中で特有の心理社会的困難に直面している。スティグマや差別を恐れるあまり、思春期の若者は精神的な支援を求めることができず、孤立感や負の対処戦略を強めてしまう可能性がある。LGBTIQ+の思春期の若者と活動するCSOの職員によると、彼らを認めない社会で生きるストレス、内面化されたスティグマ、自身のアイデンティティを隠すことによる精神的負担から生じる複合的な影響に対処するために、自傷行為、薬物使用、自己孤立に走る者もいる。特にレズビアンの子供にとって、社会での存在の相対的な不可視性は、サービス提供者が支援を必要とする女の子を特定するのに苦労することにつながる。紛争によりウクライナのサービス提供者が直面しているリソースと物流の問題に加え、これは多くのレズビアンの子供が一人で対処しなければならないことを意味する。

2.1.2 避難した思春期の若者の統合体験とは?

言葉の壁は、ポーランドとルーマニアの思春期の女の子が報告した最も一般的な課題のひとつであった。

言葉の壁

ウクライナでは、多くのIDPの女の子がロシア語圏の出身であり、ウクライナ語を話さない可能性があるため、言葉の壁も報告されている。国外避難を経験した女の子にとって、受け入れ先のコミュニティでのコミュニケーションの問題は、社会生活や全体的なウェルビーイング感を含め、生活の様々な側面に影響を与える。多くの場合、言葉の壁が孤立感や所属感の欠如につながっている。時には、言葉の壁が教育に悪影響を及ぼした事例も報告されている。また、ウクライナ人と受け入れコミュニティの文化的な違いも、限られたコミュニケーションによって増幅されることがある:

「特に、ポーランド語や文化の違い、現地の習慣など、馴染みのないことに苦労しました。ポーランドの歴史や伝説についての知識がないので、最初はコミュニティの地元の女の子とつながるのが難しかったです」

Olena、女の子、10-14歳、ポーランド

ポーランドの若い思春期の若者は、年上の若者に比べてポーランド語学習に対する困難が少ないようである。だが、ウクライナ語とポーランド語には共通点があるものの、多くの思春期の若者は、全く新しい言語を学ぶことに困難を感じている。女の子は、流暢でないことが原因で、学校でいじめや差別を受けたと報告している。

「ポーランド語は得意な言語だから、学ぶのは楽しいです。でも、同級生は、ポーランド語を早く習得するのが大変で、他の人がそのことで彼女を叱るのが嫌だった。私はそれが公平だとは全然思わなかった。彼女はポーランド人の子どもからも優しくされなかった。でも今、状況はよくなっている！先生も他の子どももすごく優しくしてくれるし、何もかもがもっと好きになりました」

Kateryna、女の子、10-14歳、ポーランド

難民や受け入れコミュニティの女の子、思春期の若者に関わる専門家を含む全参加者の中で、ルーマニアの女の子が経験した言葉の壁は、彼女たちの溶け込みと全体的なウェルビーイングに影響する重大な問題として報告された。年上の女の子(15~19歳)は特に、ルーマニア語の習得に困難を経験したと報告したが、思春期の若い女の子は、ポーランドのパターンと同様、新しい言語を習得するまでの道のりがスムーズで簡単だったようだ。ポーランドとルーマニアの難民の女の子にとって、言語の壁は、難民の女の子と受け入れコミュニティの間との有意義な交流を制限し、彼女たちの社会生活と精神的ウェルビーイングに影響を及ぼしている。

「紛争が始まった当初、私はウクライナ難民の思春期の女の子たちと関わっていました。私の経験では、若い女の子ほど最初は怯えていましたが、すぐに適応しました。しかし、年上の思春期の女の子は、言葉の壁により圧倒されるようで、依然、溶け込みできていません」

Iryna、ルーマニアの女の子、15-19歳、ルーマニア



ハラスメントやいじめを経験した 思春期の避難民の若者

ルーマニアとポーランドで避難生活を経験している思春期の女の子は、国籍に基づくヘイトスピーチやハラスメントの標的になったと報告している。こうした事件はしばしば公共の場で、彼女たちが母国語で話しているのを聞かれたときに起こった。

「彼は近づいてきて、『俺の国ではルーマニア語で話せ』と言った。彼はTシャツを脱ぎ、鉤十字を手で描いていた。ナチスのシンボルを持って歩き回り、私たちの顔を指さして、プーチンを支持するようなことを言っていた」

Erika、女の子、15-19歳、ルーマニア

ロシア語を話す思春期のウクライナ避難民の若者も、ハラスメントやいじめに遭っている。ポーランドのMiroslavaは、ハラスメントを受け、身を守るために行動を変えた。

「ロシア語を話すのがいつも快適とは限りません。バスで母と話していたら、ポーランド人のおばあさんが私を見て、ウクライナから来たのかと聞き、小さな声で私を侮辱し始めました。今は、誰かに見られたら、静かに話すようにしています。恥じるべきことじゃないけど、身を守るためには静かにしたほうがいいと思う」

Miroslava、女の子、15-19歳、ポーランド

またTrixielは、ポーランドでウクライナ人の同級生がロシア語を話すことに関係していると思われるいじめや暴行を同級生から受けているのを目撃し、身の危険を感じたと報告している。

「怖いです。私の上級クラスにいるウクライナ人の男子の子は、同級生からいつも屈辱的な扱いを受けています。トイレで殴られたり、ロシア語を話すからロシア人と呼ばれたり。私はそのことを先生に話しました。男子トイレに入ったことで、彼女は私を叱責しました。結局、誰も何もしてくれなかった。最近、彼の顔にあざがあり、唇の上に傷があるのを見ました」

Trixiel、女の子、10-14歳、ポーランド

Trixielの体験は、教師といった権威者がこれらの事件に対処しないことで、不安感が増大することも浮き彫りにしている。

ルーマニアとポーランドの思春期の女の子は、受入コミュニティの一部の人びとの間に一定の敵意があると感じていた。

ルーマニアのViktoriaは、これは、支援を受けて仕事をしない難民への憤りと関連していると指摘し、Angelinaは、ボランティア活動中に市役所の職員からウクライナ人への攻撃を経験したり、目撃したことがあると報告した。

「私たちが支援した人たちの中にも、そういう人がいました。私たちが仕事に行かないことで、ルーマニア人が不満を持つ場合が多いのです。生まれて初めて、子どもと2人きりになった母親もいます。誰も助けてくれず、助けてくれたとしても、それは必要な助けではないのです」

Viktoria、女の子、15-19歳、ルーマニア

「機関について言えば、私たちは市役所でもボランティアをしています。そこで、ウクライナ人は宿泊費受給の申請するのですが...市役所の職員でさえもそうでした...私はそこで通訳をしています、職員のウクライナ人に対する攻撃的な態度が多く見られます」

Angelina、女の子、15-19歳、ルーマニア

ポーランドでは、Mariiaが、ウクライナからの難民の突然の到着を受入コミュニティの一部がうまく受け入れていないという認識を報告した。彼女は、敵意が難民の安全を脅かす可能性があることを示唆した。

「(ポーランド人は)状況の変化に慣れていないのだと思う。(ポーランド人は)多くのウクライナ人の到来にショックを受けんです。(ポーランド人で)ウクライナ人に否定的な態度をとる人は危険です」

Mariia、女の子、15-19歳、ポーランド

ルーマニアの女の子もまた、難民として受入国でどう受け取られるかによる「よそ者」感を示した。それは、ウクライナ人である彼女たちの優先順位が受入国の人よりも低いと感じることから、ウクライナ人は難民であることで人間性を否定されたという指摘まで、様々であった。

「ウクライナ人が移住してきたため、私やウクライナ人一般をあまりよく思わない人もいるかもしれません。私たちが本当の人間ではなく、単に難民であるかのようにさえ感じているみたいです」

Zhanna、女の子、15-19歳、ルーマニア

またDianaは、難民の扱いが国籍や人種によって不平等であることを指摘した。

「例えば中東からの難民の中には、人種差別のために最悪の扱いを受けている人たちがいます。ヨーロッパ域内の難民である私たちは、まだ幸運な方だと思います。私たちは白人なので、まだいくらか幸運なのです」

Diana、女の子、15-19歳、ルーマニア

対照的な文化や考え方が統合に影響する

ポーランドの思春期の女の子は、地元コミュニティとの距離感や溶け込めなさを特に感じており、特に男の子よりもその傾向が強かった。彼女たちはしばしば、言葉の壁や文化的な違いに結びつけて、ウクライナの女の子が批判することもある、ポーランドの女の子の対照的な興味や考え方などにも言及した。

「私が見る限り、ポーランド人の考え方や行動は、私たちは全く違います。彼らには彼らのやり方があり、いつも微妙なニュアンスを受けます。彼らはオープンなようで、話そうとするととても冷たいのです」

Tamara、女の子、15-19歳、ポーランド

女の子が、彼女たちは歓迎されていない、それどころか国籍のせいで危険にさらされているという認識から、ポーランド社会に属していると感じられないと説明する場合もいくつかあった。

「大半の(ポーランド人は)ウクライナ人が嫌いなので、社会の一員だと実感できません」

Liza、女の子、15-19歳、ポーランド

「知人が殴られました。彼女と彼女の仲間(友人)が歩いていて、大声で何か言っていたら、(ポーランド人が)彼女たちの国籍についての嫌がらせをしたんです。結局、全員殴られました。なぜそんなことが起こるのか、理解できませんでした」

Kamila、女の子、15-19歳、ポーランド

本調査に参加した女の子の多くが、社会的結束に関する課題を報告したが、ポーランドとルーマニアの思春期の若者の経験が一様でないことも明らかである。肯定的な経験も否定的な経験も報告した女の子もいれば、受け入れ側のコミュニティの受け入れを批評した参加者仲間とは意見が合わず、代わりにウクライナを離れてからの方がずっと気分がいいと述べた女の子もいた。

「(ポーランド人の中には)ウクライナ人が嫌いで、公に議論する人もいます。私の家の庭で、いつも『プーチンに栄光あれ』『ロシアに栄光あれ』と言う男の子集団がいました。逆に、とても理解があり、贈り物をくれる人もいて、フンディアには、大晦日に一緒にビスケットを配ったおばあさんがいました。私たちはとても仲良くなり、お互いにプレゼントを贈り合いました」

Asya、女の子、10-14歳、ポーランド

「私は逆の状況です。例えば、私はここでは落ち着ける。つまり、夕方でも何も怖がることなく一人で歩いて帰れます。もちろん、どこにでも変な人はいるけれど、ウクライナで歩く方がずっと怖かったです」

Liliya、女の子、15-19歳、ルーマニア

2.1.3 思春期の若者はどう対処し、どんな支援を受けられるのか

この困難な状況下で、思春期の女の子と男の子は、**ストレス、恐怖、不安に対処するために、様々な対処法をとったことが報告されている。**

思春期の若者の対処メカニズム

ウクライナでは、15～19歳の女の子が、紛争の厳しい現実から気をそらし、平常心や平穏な感覚を作り出すために、特定の活動にどう取り組んでいるかを説明した。こうした活動には、読書、音楽鑑賞、絵画、友人との散歩が含まれる。ウクライナの15～19歳の女の子の何人かは、自身が経験している困難が、長引くストレスに対する回復力を高めていることを強調し、日々の困難に対処するための対処戦略に積極的に取り組むことで、自信を高めたと指摘する者もいた。

「本が不安に対処するのに役に立ちました。不安を感じるといつも本を読み始めます。また、音楽を聴いたり、友人と歩いたりすることで、気持ちが落ち着き、平穏になります」

Sonia、女の子、15-19歳、ウクライナ

思春期の女の子も男の子も、自身のウェルビーイングのためにこの種の活動に参加することに同程度の関心を示したが、女の子は屋内の活動を屋外の活動と同じくらい楽しんでいると報告したのに対し、男の子は屋外の活動をより強く好むと表明した。ウクライナでは、特に10～14歳の男の子が、オフラインの活動に積極的に参加する傾向を示し、地域コミュニティ内でピアグループの結成・参加により大きな役割を果たしている。国際NGOの職員によると、この傾向は男の子がIDPである場合にも当てはまる。観察によると、男の子は女の子よりも社会的なつながりを確立することによって新しいコミュニティに同化するのがいくらか容易である。ウクライナの思春期の若者を支援する現地CSOの代表者によると、このような溶け込みやすさは、男の子が往々にして外向的であることを奨励され、同年齢の他の男の子と共通の趣味や興味を共有し、活動することが期待されるためでもあるという。

ポーランドとルーマニアの10～14歳の難民の女の子の多くに心的外傷後ストレス障害(PTSD)、ストレス、不安の兆候が見られたが、ウクライナを離れてから安全や治安のリスクがそれほど深刻でなくなったため、ストレスレベルが比較的低下したと報告する女の子もいた。ポーランドとルーマニアの10～14歳の思春期の難民の女の子の間では、描画や作文のような共通の趣味に没頭することが、重要なストレス対処法として浮上した。

「私の感情は以前ほど鮮明ではなくなりました。ポーランドへの移住後、当初は対処するのが難しかったけれど、新しい友人関係を築き、社会的な活動に参加することで、気分が改善されました」

Nika、女の子、15-19歳、ポーランド



保護者によると、10～14歳は、15～19歳に比べて適応性が高く、ルーマニアのコミュニティへの移行がスムーズだという。日常生活の中断(メンタルヘルスに悪影響を及ぼすと知られている変化)を経験したにもかかわらず、10～14歳の難民の女の子は、ルーマニア到着後、規則的なスケジュールを取り戻すことに成功しているようだ。保護者は、日課や週課、定期的な登校、コミュニティ行事への参加など、プラスの影響が見られると報告している。

保護者は特に、ダンスやスポーツ、文化的な参加など、体系化された身体活動の利点を強調し、言葉の壁や慣れない環境であっても、思春期の若者がエネルギーを発散し、情緒を安定させるのに役立っていると述べた。

このような活動は、目的意識を与えるだけでなく、ポーランド語やルーマニア語のスキルを向上させ、新しい社会的・文化的力学への適応を促進する。

「思春期の若者は、女の子も男の子も、社交の場がもっと必要です。言葉の壁が障壁になっています。少なくとも、彼らのウェルビーイングと統合のために、組織はこのような活動を増やすべきです」

女性保護者、ルーマニア

不安の軽減における家族や友人の役割

10～14歳の女の子も男の子も、不安のレベルを下げるために家族や友人関係の重要性を強調した。

「怖いと思ったら、母のところに駆け寄ってハグするんです。母と一緒にいると、いつも安心できて落ち着きます」

Tatiana、女の子、10-14歳、ウクライナ

「ええ、友人や家族だと思います。最高のサポートです」

Vitaly、男の子、10-14歳、ルーマニア

多くの思春期の若者が、友人や家族など、信頼できる社会環境にいたことが、精神的な安らぎを生み出すと報告している。母親からの支援は繰り返し強調され、多くの女の子が母親を最大の支えに挙げていた。家族は思春期の若者のウェルビーイングを支える上で重要な役割を果たしうるが、あるNGOの代表は、保護者が精神的な健康状態について限られた知識しか持っていないこともあり、思春期の若者のニーズを認識し、専門的な心理社会的支援が必要な時期を見極めることができるよう支援する必要があることも強調した。

また、10～19歳の女の子と男の子にとって、友人は、情報を提供し、進行中の脅威に対処するのを助け、交友関係を築いてくれる、重要な役割を果たしている。更に、男の子はユーモアを見つけ、新しい状況に適応する一方で、愛する人が近くにいることが感情的な対処に役立つと報告している。

否定的な対処メカニズム

一部の保護者によると、思春期の若者はストレスや不安に対処するために、否定的な対処法にも手を出しているという。ウクライナでは、保護者は、ジェンダーに関わらず、電子タバコの使用が顕著に増加していると報告している。手軽に入手できることが、思春期の若者、特に15～19歳の若者の間で利用が増えている一因となっている。

「紛争が激化して以来、思春期の女の子や男の子が電子タバコを吸うようになった。これらの製品は合法的に商店で売られており、思春期の若者の睡眠障害を引き起こしています」

男性保護者、ウクライナ

夜間にネットやスマートフォンを長時間利用することも、睡眠の質に影響を及ぼす否定的な対処法として報告されている。睡眠障害につながる場合もあり、女の子や男の子が直面しているメンタルヘルス関連の困難を悪化させている。15～19歳の女の子も、喫煙や長時間のネット利用など、否定的な対処法を取り入れていると自己報告している。

「タバコを吸いたくなるんです。とてもストレスが溜まると、とても吸いたくなります。本当に吸いたいです。最近、自制しようとしています。でも、それは何の役にも立たないし、一瞬気分が良くなりそうかもしれないけど、そのせいで不安が増していることも分かっています」

Sofia、女の子、15-19歳、ルーマニア

紛争によるストレスや不安が思春期の女の子の乱れた食生活を助長している可能性が示唆されている。Oleksandraの話にもあるように、ボディイメージに基づく社会的圧力と相まって、更なるストレスや不安を引き起こす可能性がある。

「紛争中の経験には対処できたと思っけていても、まだ私の思考に大きな影響を及ぼしています。そして、私は食事するときに、いつも『痩せなければ』、という圧力を感じます。こうした浮き沈みの全てが、私に悪影響を与えます。成長期でホルモンの変化を経験している私にとって、わずかでも体重が増えることが大きな恐怖です。もっと運動しなければとか、もっと食べる量を減らさなければとか、すぐに考えてしまいます」

Oleksandra、女の子、15-19歳、ルーマニア

メンタルヘルスサービス提供の隔たり

思春期の女の子とその保護者は、心理社会的支援サービスへのアクセスにおける大きな隔たりを強調し、この支援の必要性を強調した。

「必要なのは、個人カウンセリングやグループカウンセリングで恐怖心を解消してくれる心理士の支援だと思います」

Darya、女の子、10-14歳、ルーマニア

「メンタルヘルスについて私たちに教えても、役に立たないと思う。私たちの話を聞き、支援してくれる人が必要なのです。導きを与えてほしい」

Nastya、女の子、15-19歳、ポーランド

本調査に参加した思春期の女の子の中で、専門的な精神的支援を受けたと報告した人はほとんどいなかった。ポーランドとルーマニアの思春期の難民の女の子のほぼ全員が、保護者、兄弟姉妹、他の家族、友人からしか精神的支援を受けたことがなく、そうしたサービスを利用する必要性が認識されているにもかかわらず、専門的な支援を受けたことがないことを強調した。調査に参加した女の子のうち、無料で利用できるメンタルヘルスサービスを知っていたのはごく少数で、多くは心理社会的支援を受けるにはお金を払わなければならないと思っていた。

「紛争が始まって以来、ストレスで頭痛やめまいがします。主治医はこれらの症状をストレスのせいだと言っていますが、どう対処すべきかはまだはっきりしません。更に、経済的な理由で心理士に診てもらうこともできません。高すぎて手が出ません」

Sonya、女の子、15-19歳、ポーランド

ポーランドとルーマニアの10～19歳の女の子の多くは、ユースに対する専門的なメンタルヘルス支援、特に個別カウンセリングの重要性を認めていた。大人向けのサービスが提供されているのを知っており、思春期の若者を対象としたメンタルヘルス支援の必要性を表明している者もいた。

「私たちが議論しているのは、精神的なウェルビーイングに大きく関係しているのかもしれませんが。(開戦から)1年半以上経っているので、最近はこの問題があまり注目されていないようです。思春期の女の子に対する具体的な精神的な支援が行われてきたか分かりません。一部の組織では大人向けの取り組みが行われていますが、思春期の女の子として、私たちが重大な精神的困難に直面していることを忘れてはいけません。誰もが経験するストレスレベルが高まっているため、おそらくそれ以上でしょう」

Tanya、女の子、15-19歳、ルーマニア

思春期の女の子に緊急心理社会的支援を提供しているポーランドのあるCSOの代表は、15～19歳の女の子は、養育者が寝ている深夜にカウンセリングを受けることを希望することが多いと指摘した。深夜にカウンセリングを受けようとするのは、プライバシーを守りたいという願望を示すと同時に、カウンセリングを受けることを保護者に隠すことで、彼女たちが直面している問題を保護者と共有することを避けていることを示唆しているのかもしれない。

「多くの子どもは夜、保護者が寝ているときに電話をかけてきます。電話中に保護者が目を覚まし、そのセッションの意義について口論になることもあります。私はそのやり取りを聞いているのです」

思春期の若者と支援する地元CSO、女性、ポーランド

一部の思春期の若者は、インターネットを利用して、保護者の手助けなしに、必要な専門的支援に自らアクセスすることができる。だが、ウクライナの思春期の若者と協働している現地のCSO代表が強調したように、テクノロジーやネットへのアクセスが同世代の若者と同等レベルではない、疎外されたコミュニティで暮らす女の子にとって、このような支援にアクセスすることは困難だ。

「全ての人にとっての精神的・心理社会的ウェルビーイングは非常に重要なのですが、この問題に関する教育がまだ欠落していると思います。紛争によるトラウマ(ミサイル、占領)により、多くの人がPTSDを発症しており、利用できる心理的支援が緊急に必要なことは明らかです。さらに、この必要不可欠な支援は、しばしば読み書きができず、このようなサービスの恩恵を受けるために必要な技術を持たないロマ・コミュニティには、届かないことはもっと知られるべきです」

思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

事例研究2: Mikayla、ルーマニア

Mikaylaはウクライナのハルキウ出身で、ルーマニアのイアシュイに避難した19歳の女の子である。Mikaylaは、紛争の激化によって彼女の人生が大きく変わったことを語った。紛争が始まる前、彼女はとても社会的で、勉強したり、友人と交流したり、絵を描くことに情熱を注いでいた。彼女は、恐怖と不確かさが日々の現実となっている現在の状況とは対照的に、友人と自由に歩き、話すことができた時代を鮮明に覚えている。

ウクライナの情勢不安から、彼女は友人や社会生活、周囲の環境を捨てることを余儀なくされた。ルーマニアへの移住によって安全にはなったものの、Mikaylaは、コミュニケーションの制限と、そのため新しいコミュニティの仲間との関係が制限されるなど、新たな課題も生じたと説明した。言葉の壁が、新しい友人を作ったり、新しい社会環境への参加を妨げている主な理由であり、それが彼女に孤立感を与えている。

「孤独です。言葉もわからないし、ルーマニアには友達もいない。母と祖母と父としか話さないの」。Mikaylaは、以前の生活や友人関係を思い返しながら過ごしているという。「友達が恋しい。以前は散歩したりおしゃべりしていたのですが」

Mikaylaの典型的な1日の過ごし方は、家族と過ごすか、ひとりで過ごすかだ。午前中は母親の手伝いをし、犬の散歩をし、テレビを見る。午後になると、彼女は大好きな絵を描くことに没頭する。絵を描くことは彼女にとって重要なはげ口であり、新生活の変化やストレスに対処するための対処法でもある。**「描くの。それが私の唯一の趣味です」**

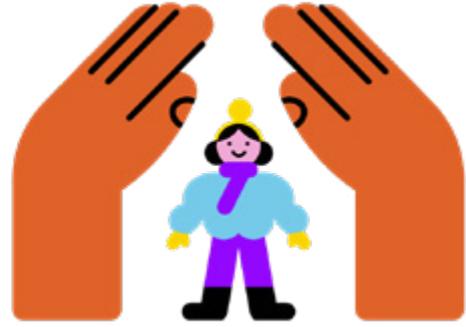
母親、父親、祖母のサポートはMikaylaにとって重要であり、家族と一緒に過ごすことで気が紛れるのだという。**「保護者と充実した時間を過ごすことで、紛争の影響を忘れることができます。彼らと会話していると、あまり孤独を感じないのです」**。だが、ルーマニアに社会的な輪がないことは、彼女の精神的ウェルビーイングに深刻な影響を及ぼしている。**「でも、やっぱり寂しい。友達がないのは辛いです」**

将来が見えないMikaylaは不安を抱えている。紛争は彼女の日常生活を崩壊させただけでなく、長期的な計画や夢にも不確定要素をもたらしている。故郷に帰るという選択は、彼女の一番の願望だ。**「ウクライナに帰りたい」と彼女は言う。ルーマニアで新しい生活を築こうとする彼女の話は、紛争が思春期の若者に与えた深刻な影響を浮き彫りにしている。「辛いです…。全てが変わってしまいました」**。

**孤独です。言葉も
わからないし、
ルーマニアには
友達もいない。**



2.2 安全と暴力からの保護



2.2.1 思春期の若者が直面する主な保護リスクとは

調査対象3カ国の思春期の女の子、男の子とその保護者は、紛争の激化が**彼らの安全意識にどんな影響を与えたか**について話し合った。参加者が提起した子どもの保護に関する懸念は、ウクライナ在住者とポーランド、ルーマニア在住者とでは異なっていた。

ウクライナの主な保護リスク

ウクライナでは、紛争に直結する爆弾や暴力が個人の安全を脅かすという懸念が、圧倒的な割合で寄せられた。

「安全が第一です」

女性保護者、ウクライナ

とりわけハルキウなど前線に近い都市では、何よりも安全が優先だと、保護者は強調した。ウクライナの各地にいる保護者は、爆弾が思春期の若者の身体的・心理的ウェルビーイングにもたらすリスクは、最終的に、広く彼らの移動を制限することになると説明している。このように、紛争の激化によって生じた不安は、思春期の女の子と男の子の両方にとって、移動の自由に大きな影響を与えている。

思春期の女の子と男の子は、爆弾に対する恐怖と、紛争が彼らの安全意識に与える影響を共有し、しばしばパニックと不安の状態を描写した。彼らの懸念は、攻撃の予測不可能性と避難所の妥当性に集中していた。

「私たち家族は、母と弟と私の3人で国外に出ることを考えていました。自分たちの安全を確保するためにね。今のウクライナは紛争状態で大変だし、とても怖い。弟もよくその話をするようになりました。警報が鳴ると、『ママ、ロケット弾が飛んでくるの？今すぐ避難所に行くべき？』といった感じで、ウクライナはあまり安全ではないと感じます」

Sofia、女の子、10-14歳、ウクライナ

「本当に怖かった。私たちの村で、ロケットが窓を突き抜けたんです。ニュースチャンネルで、いつ、どこから飛んでくるか、警告が流れるはずだ、と自分に言い聞かせて、心配しないようにしています...」

Vadym、男の子、15-19歳、ウクライナ

紛争は、ウクライナの思春期の若者にとって、安全な地理的条件を日常的に考慮させるようになった。特に町や村のはずれでは、避難所までの距離が遠くなり、コミュニティに避難所がないことを懸念している。

「避難所は3つしかなく、そのうちの2つは市の中心部にある...仮にミサイルが飛んできて、避難所がなかったとしたら...」

Vasyl、男の子、10-14歳、ウクライナ

ウクライナの思春期の若者の教育に影響を及ぼす治安リスク

ウクライナの思春期の若者とその保護者は、避難所を探す必要性による継続的な混乱が、思春期の若者がウクライナで学校に通い、一貫した教育を受ける能力にどう影響するかについて話し合った。ウクライナの思春期の若者は、爆弾の危険があるため、学校にいるより家にいる方が安全だと感じていると説明した。思春期の女の子は、生徒が「常に教室から地下室に逃げ込む」混沌とした教育環境について説明した。「一日中こんな感じ」(Oksana、女の子、10-14歳、ウクライナ)。頻繁に爆弾が投下され、避難所への移動が必要な紛争の中で生きている現実には、思春期の若者の教育を中断させ、学校空間での不安感を強めている²²。

ウクライナの女の子とその保護者は、このような安全保障上の懸念から、リモート教育様式を希望し、身体のウェルビーイングを守ることの優先順位を強調した。

「学校では、例えば、爆弾のサイレンが鳴り始めると、先生が『みんな、地下室に行きなさい！』って言います。そして、私たちはずっと地下室に座っているんです。だから、私の保護者は、女の子も男の子も学校に行かずにリモート学習することに賛成しています。私たちが授業中に爆撃を避けて地下室に行くことを恐れているのです」

Sofia、女の子、10-14歳、ウクライナ

家庭での監督が手薄になることで高まるリスク

ウクライナにおける思春期の若者の安心感は、爆弾だけでなく、紛争によって保護者、特に女性のひとり親の負担が増加したことによっても危うくなっている。保護者は、思春期の若者を監督することよりも、基本的なニーズを満たすことを優先することになり、その結果、子どもの保護リスクが高まる可能性がある。インタビューでは、国際NGOや地元のCSOの代表の何人かが、こうした家庭の思春期の若者が、ガスを使った料理や化学薬品の取り扱いなど、危険な行為をしていることを懸念していた。大人の監視が手薄になることで、事故の危険性が高まり、彼ら自身では対処できないようなリスクに思春期の若者がさらされることになる。

「ひとり親の場合、求められる全てのニーズや責任に応えることは困難です。彼らの多くは日中、家を離れて働いています。一方、このような状況では、思春期の若者が弟妹の面倒を見たり、重大な子どもの保護リスクを生む可能性のある家事をしったりすることになるのです」

国際NGO代表、女性、ウクライナ

子どもの保護リスクは脆弱な集団ほど深刻

ウクライナで思春期の若者と協働している国際NGOや地元のCSOの代表者は、同伴者のいない未成年者、障害のある思春期の女の子や男の子、ウクライナの施設からルーマニアやポーランドに移された思春期の若者、ロマのような少数民族の女の子など、特定のグループの脆弱性が高まっていることを強調した。これらの思春期の若者は、支援システムの崩壊から潜在的な虐待にさらされることまで、紛争が既存の脆弱性を悪化させているため、多層的なリスクに直面している。

NGO職員は、安全な宿泊施設へのアクセスや、身体の安全のために必要な避難の困難さなど、紛争によって生じた、障害のある思春期の若者への保護の困難について話し合った。現地CSOの代表者によると、障害のある女の子や男の子は、彼らのニーズを満たすために、外部からの支援に加えて、保護者やその他の家族に頼ることが多い。紛争が家庭構造や経済状況を崩壊させたため、そのような家族の支援は損なわれており、一方、外部のサービス提供者は、障害のある女の子や男の子が孤立していることが多いため、彼らを特定する上で困難に直面している。

NGO職員によれば、ケア施設で暮らす、障害のある思春期の女の子や男の子は、更なる困難に直面している。ケア施設に入所している思春期の若者の多くは、紛争以前から、束縛、ネグレクト、資源の欠如など、悲惨な状況や処遇にさらされていた。NGO職員は、特にウクライナ東部の紛争被災地では、ケア施設に入所している障害を持つ思春期の女の子や男の子の多くが、安全な地域に避難し、その多くが国境を越えて他国に移動したことを強調した。しかし、より包括的な支援を必要とする思春期の若者が、ウクライナの遠隔地に残っていることも懸念された。

「一部の女の子や男の子は、十分な職員がいないため、縛り付けられたり、動くことなくベッドに置き去りにされたり、暗くて換気の悪い不快な臭いが漂っている部屋に入れられたりしています...ケア施設で働く職員は、こうした状況に対処するために必要な資源も知識もないため、一日の大半を女の子や男の子たちを拘束しているのです。遠隔地の施設にいる女の子と男の子の居場所を突き止め、彼らの安全を確保するために、早急な対応が必要です」

思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

同性愛嫌悪とトランスフォビアは思春期の若者の保護リスクを高める

ウクライナの15~19歳の思春期の女の子と男の子は、LGBTIQ+の人びとが、そのアイデンティティが人種的・民族的マイノリティや社会階級など、他の疎外された状況と交差するときに、しばしば直面する複合的な差別的形態について議論した。



Dominika(16歳)と彼女の友人は、一緒に携帯電話を見ている、ウクライナ。
写真クレジット: Mishchenko Mikhailo © Plan International

この交差性が多面的な脆弱性をもたらし、彼らの安全ニーズを複雑かつ独特なものにしている。参加者は、ウクライナのこれまでの世代に比べて、ユースの間に同性愛嫌悪が少ないことを指摘した。だが、思春期の若者もCSOの職員も、LGBTIQ+コミュニティのメンバーに対するスティグマや差別、多くの空間における敵意は、紛争の激化以前も以後も、社会の多くの地域で依然として根強いことを指摘した²³。あるCSOの代表は、LGBTIQ+コミュニティの可視性は、兵役に参加することで高まり、一部の都市部ではコミュニティに対するスティグマや差別が減少した可能性があるとして述べている。しかし、特にウクライナの地方部では、否定的な態度は依然として根強く残っている²⁴。

「学校でも、職場でも、その他の教育機関でも、かなり危険です。確かに今、同性愛嫌悪のレベルは徐々に低下しています。とはいえ、同性愛嫌悪がなくなるまでにまだ何年もかかるし、危険です」

Yana、女の子、15-19歳、ウクライナ

紛争の激化は、ウクライナのLGBTIQ+コミュニティのメンバーの既存の脆弱性を悪化させた。個人がスティグマや差別を経験する恐れから、自分の性自認や性的指向を公表することに対するためらいを感じている場合、安全な避難所を見つけたり、個人情報に要求された場合に基本的なニーズを満たすことが困難に直面する可能性がある²⁵。これは特にトランスジェンダーの人にとって、書類が性自認と一致しない場合、重要な課題となりうる。ウクライナのあるCSOの代表は、LGBTIQ+コミュニティのメンバー、特に女性、トランス女性、トランス女の子が、避難所で暴力にさらされているという憂慮すべき問題を提起した。

「ジェンダーに基づく暴力(GBV)の被害を受けた思春期の女の子の何人かは避難所に行こうとしましたが、避難所の管理者が彼女たちがLGBTIQ+であることに気づいた瞬間、彼女たちの多くは避難所に入ることを拒否されたのです。残念なことに、この差別はLGBTIQ+の思春期の若者をより危険にさらすのです」

LGBTIQ+の思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

アイデンティティと健康に関する正確で肯定的な情報の入手は、LGBTIQ+の思春期の若者にとって救いとなり、ネットは思春期の若者が困難を乗り越え、サービスにアクセスし、否定的な社会的メッセージに対するレジリエンスを構築するのに役立つ。

「(10~14歳の)LGBTIQ+の思春期の若者は、自身を発見する時期にいます。だから、彼らは常に様々な情報源、特にオンラインで情報を求め、現在進行中の経験を理解し、同じような生物学的、行動的、感情的な課題を経験する仲間とつながるための情報を得ようとし、情報源としてのインターネットは、こうした思春期の若者にとって救いの手なのです」

LGBTIQ+の思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

しかし、同じCSOの代表は、インターネットがLGBTIQ+の思春期の若者にとってコミュニティや情報を見つけるためのライフラインになりうる一方で、暴力や搾取、誤情報にさらされるリスクもあると指摘した。また、彼らが支援している思春期の若者は、恐怖心を抱き、暴力の経験について話したくないことがあるとして、個人が安全に自身の経験を共有し、必要な支援を受けることができる環境の必要性を強調した。

2.2.2 思春期の若者は性暴力やGBVからどう影響を受けるのか

ウクライナ、ポーランド、ルーマニアの思春期の女の子は、家庭、オンライン、公共の場でのGBVなど、複数の複合的な保護リスクにさらされていると報告した。ルーマニアとポーランドでは、女の子は対面・オンラインの両方でセクシュアルハラスメントに憂慮すべき確率で遭遇すると報告しており、このような体験が多くの人に当たり前になっているように見えるほどで、身を守るための安全対策も負担になっている。

性暴力への恐怖

調査対象3カ国すべてにおいて、思春期の女の子は性暴力を経験することへの強い恐怖を表明した。安全や安心感について尋ねると、レイプやその他の性的暴行に対する懸念は、思春期前期と中期・後期(10~19歳)の女の子から報告された。ウクライナの女の子は、紛争そのものがもたらす不安よりも、性暴力をより懸念している場合もあった。

「ウクライナで既に経験済みだから心配です。私を追いかけてきてキスしようとした男がいたんです。私は彼を殴り、すぐに家に逃げ帰りました...今、私の最大の悪夢はレイプです」

Rico、女の子、10-14歳、ポーランド

現在ポーランドに住んでいるRicoのような女の子にとって、このような不安は日常生活に影響を及ぼし、不安感 は彼女を過敏にさせている。

「私を見る通行人は皆、悪事を企てているのではと 思っ てしまいます。そして、誰かに長い間見つめられると、その人が私の家までついてきて、角で私を連れ去り、殺すか、レイプするのではないかと思うのです」

女の子が自身のコミュニティを安全なものにする方法について提案したものには、家の外に警備員を配置することや、隠しカメラや「壊されない鍵」(Jisu、女の子、10-14歳、ポーランド)を提案するものもあり、家に対する不安感が表れている。

ウクライナの思春期の女の子は、性暴力やその他の犯罪の加害者が多く存在し、警察の保護やサバイバーのための正義が欠如していると考えているため、危険を感じているとも報告している。

襲撃の話があるから一人で歩くのは怖いです

「私は80%しか安全だと感じていません。それは、レイプ犯がどこにでもいて、私に安心感を与えてくれず、私がいる環境に居心地の良さを感じさせてくれないからです」

Olena、女の子、15-19歳、ウクライナ

女の子は、襲われることを恐れて行動を変え、特に夜間の外出や一人歩きを避けるようになったと報告した。ウクライナとルーマニアの両国で特に懸念されたのは、街灯がなく、女の子にとってさらに危険なことだった。これはウクライナ国内の、紛争による停電の影響だった。不安な気持ちは、セクシュアルハラスメントや暴行の個人的な経験に由来する場合もあった。しかし、女の子は、他者の暴力体験談を聞いてから恐怖心が芽生えたとも述べた。

「襲撃の話を知ったので、一人で歩くのは怖いです」

Jisu、女の子、10-14歳、ポーランド

「私より少し年上の知人が、帰宅中にレイプされたんです...とてもかわいそうに思いました。それ以来、どこにも出かけたくない時期が続きました。全く外出しませんでした。学校、家、学校、家、学校、家、学校、家、ということばかり考えていました。念のため、一緒にいる人と行動するようにしていました」

Marie、女の子、10-14歳、ポーランド

また、ポーランドのMarieは、女の子はソーシャルメディア上でこのような話を目にし、心理的に悪影響を受ける可能性があるとして説明した。

「私はそういう話を見たことがあるので、ソーシャルメディアは脅威になりうると思う。女の子は余計なことを知ってしまい、怖くなって、危険だと感じているのかもしれない」

公共空間におけるセクシュアルハラスメントと性暴力

特にルーマニアとポーランドの思春期の女の子は、公共の場でのセクシュアルハラスメントや性的暴行の事例が極めて多い、と報告している。これには、男性による公共の場での自慰行為、猫なで声、許可なく撮影されること、そして性的暴行が含まれるが、彼女たちはそれを保護者に報告しないことが多い。

「短いスカートやトップスを着ていると、車からクラクションを鳴らされることがある。何度もありました。ビデオに撮られたことも。もちろん不愉快だけど、仕方ありません。どこの国でもそんなものです」

Larysa、女の子、15-19歳、ポーランド

「歩いていると、男たちが大声を出したり、嫌がらせを始めたりすることがよくあります。時には車の速度を落としたりもする。怖いんです。だから一人で歩くのはあまり気が進みません」

Danya、女の子、15-19歳、ルーマニア

ルーマニアのAnna(15-19歳)は、セクシュアルハラスメントの経験から、「男性と接触を持たないようにしている」。同様に、ポーランドのMarielは、性的暴行を受けて以来、「男の子に触らせないようにしている」と話し、こうした犯罪が女の子の心理的・社会的ウェルビーイングに長期的な影響を与えることを示している。

「赤ちゃんを抱いた男が、私のお尻を触り、次にお腹を触り、更に上を触ってきて、私とその男の方に向くと、彼は微笑みを浮かべて私を見ていました。後で友達に話したら、ひどい話だと言われましたが、両親には言いませんでした」

Clara、女の子、15-19歳、ポーランド

ポーランドとルーマニアの女の子は、国籍が理由で男の子や男性から嫌がらせを受けたと報告しており、難民としての可視性が、いかに略奪的な男の子や男性の標的になりうるかを示している。

「多分男性だけでなく、ルーマニア人からも好奇の目で見られるようになったんだと思う。ウクライナ人がルーマニア人のクラスに行けば、私たちは他の女の子だから、みんな興味を持つんです」

Anastasia、女の子、15-19歳、ルーマニア



「ポーランド人の男の子は、学校でウクライナ人の女の子をよく口説きます...誰とも共通語を見つけられないウクライナ人の女の子がやってくると、彼女は誰よりも無力になる。男の子は居心地よく感じ、ハラスメントが起こります。ハラスメントはいずれ起こるのですが、ひとりて来るという状況ですから、自動的に無防備になるのです」

Christie、女の子、15-19歳、ポーランド

思春期の若者の難民は、受け入れ国での社会的な支援体制を持たないことが多いため、新しい人間関係を求めようとすると、暴力の加害者に狙われる可能性がある。ルーマニアの Daniela は、ウクライナから入国した女の子が出会い系アプリを通じて加害者と知り合ったレイプ事件について説明した。彼女は、加害者の国籍のために警察が動いてくれなかったと報告した。このような話は、難民である思春期の女の子の脆弱性が高まっていることを示し、女の子が性暴力を報告しづらい一因となっている。

「私の知り合いに、ブカレストに来た女の子がいました。友達も知り合いもないため、彼女は『Daivincic』というサイトにアクセスしたんです²⁶。そこで出会った男の子はいい男だったんだけど、会ってみたらレイプされました。警察に行っても、彼はこの国の国民ではないので、扱わないと言われたんです」

Daniela、女の子、15-19歳、ルーマニア

被害者を非難する態度の支持

3つの調査対象国全体を通じて、女の子は被害者を非難する態度を特に認識しており、場合によっては警察に犯罪を報告することに消極的になっていることが報告された。

「ルーマニアの警察に行けば、自分が悪いんだと言われます」

Inna、女の子、15-19歳、ルーマニア

「君が彼を挑発した。男が防弾チョッキを着ていなかったから彼を撃った。彼女があんな格好だったからレイプした」

Alina、女の子、15-19歳、ルーマニア

性的暴行を受けたことを両親に報告しなかった理由について、Marieは、両親に暴行を誘発したことや反撃しなかったことを責められるだろうと説明した。

「だって、ママは『あまりに大胆な格好をしすぎ』言うに決まっています。パパは『どうしてすぐに来てくれなかったんだ。私なら顔を殴っていただろう』って。パパは私に殴り方を教えてくれたから、『どうして反撃しなかったんだ』って言うでしょう」

Marie、女の子、10-14歳、ポーランド

被害者を非難する態度を繰り返す女の子もいた。このことは、性暴力の原因として加害者の役割を認識しない語りを女の子が内在化していることを示唆しているのかもしれない。

「私の街では、そういう上着や短いスカートを着ている女の子は、何も恐れていませんし、ちゃんと守られています。中にはわざとそういう格好をして、誰にも尾行されないように、盗まれたりレイプされないように、辺りを見回しながら歩いている子もいます」

Antonina、10-14歳、ウクライナ

女の子は自己防衛に走る

女の子が安全だと感じられるためには何が必要かという質問に対し、共通していた回答は、暴力から身を守るための訓練と装備を整えることだった。女の子は、唐辛子スプレーやその他の自己防衛用具の提供を望んでいた。

「護身キットを買う必要があると思う。Aliexpressで50PLNで買えるわ。口紅のスタンガン、バタフライナイフ、殺傷マシーンになる特殊な指輪、鋭利なナイフになる十字架、鉄筋になるキーホルダー、大きな長い棒」

Rico、女の子、10-14歳、ポーランド

Marieのように、女の子が自身の身を守るようにすることを勧めたのは、彼女がウクライナにいたときに、暴力の脅威から家族が武装するようになった紛争体験と関係がある場合もあった。

「最低限、女の子には唐辛子スプレーを与え、自己防衛術を教えるべきだと付け加えたいです。ウクライナの私の町では、奴らが住宅を襲って人びとを殺した、虐殺がありました...だから父は私にガス缶をくれて、ナイフを持たせて寝かせてくれた。父と母は父の銃を持って寝た。それくらい危険な状況だったんです」

Marie、女の子、10-14歳、ポーランド

ジェンダー規範と教育の役割

自己防衛術を教えること、危険な状況やその回避方法について話し合う機会を設けることを求めたほか、女の子はジェンダーの社会化の影響を指摘し、男の子と男性が女の子と女性を尊重するよう教育することを勧めた。

「男の子に幼い頃から、女性は性的な対象物じゃないと教える必要があります」

Christie、女の子、15-19歳、ポーランド

ルーマニアのKalynaは、男性や男の子が女性に暴力を振るうのは、彼女たちを人間として見ていないからだと言及し、彼らに伝える必要があると説明した。

「いいかい、暴力にはやってはいけないものがあるんだ。女性は人間なんだから、手を出してはいけないんだ」

Kalyna、女の子、15-19歳、ルーマニア

ポーランドのMarinaもまた、GBVIに闘う上での教育の重要性について語った。だが、この場合、彼女は暴力にさらされたときの対処法を教わりたかったのだ。

「学校は危険な状況での行動について教えるべきだと思います。例えば私は、暴行やレイプを受けたらどうすればいいのかわかりません」

Marina、女の子、15-19歳、ポーランド

オンライン・セクシュアルハラスメント

特にポーランドでは、ネット上でのセクシュアルハラスメントの事例が数多く報告されている。これには、思春期の若者のふりをした成人男性からの「キャットフィッシング」、見知らぬ男の子や男性、あるいは女の子が実生活で知っている個人からの迷惑なヌード画像の受信、女の子のプライベート写真の要求、女の子の同意なしにネット上で女の子のプライベート写真を共有すること（これは児童ポルノ犯罪ともみなされる）などが含まれる。

「大人の男性がプライベート写真を送ってきて、とても不快な思いをした経験があります。少し年上の男の子も、私に性的なことを持ちかける書き込みをしてきました。私たちは実生活で顔見知りでしたが、彼は私のプロフィールを見つけて、そういうことを書き混んできたんです」

Mariia、女の子、15-19歳、ポーランド

...学校は危険な状況での行動について教えるべきです。

女の子が議論したいいくつかの事例は、オンラインと現実のハラスメントやリスクの間の一線を示すものだった。

「Telegramでは、親しい人と会うことができます」

Nastya、女の子、15-19歳、ポーランド

「Telegramのこの機能はなくすべきだと思う。バスで向かいの席に座っていた男の子が私を変な目で見ての気づいたんです。翌日、彼は私に奇妙なメッセージを送ってきたので、私は彼をブロックしました」

Sonia、女の子、15-19歳、ポーランド

女の子の報告によると、オンラインアプリ「daivinchik」は12～30歳の子どもから大人までが利用しているという。

「私も『daivinchik』に関連したことがありました。ある男の子と知り合って、1週間ほど連絡を取り合っていたのですが、その男の子が突然、私の居場所を教えてくださいと言ってきて、私の家の近所から動画を送ってきて、もう着いたと言って、私の居場所を聞いてきたのです。結局、私はその男の子をブロックしました」

Lada, girl, 10-14, Poland

KIIでは、ウクライナのCSOの代表も、紛争の影響（上述）と関連しがちな、思春期の若者に対する親の支配力の低さや、サイバーセキュリティに関する保護者の知識の全体的な低さといったリスク要因を強調した。これらはいずれも、サイバー犯罪に対する思春期の若者の脆弱性の一因となっている。適切な監督とインターネットの安全教育がなければ、思春期の女の子は性的搾取や虐待、金銭詐欺スキーム、その他のインターネットを利用した搾取に遭うリスクが高まる可能性がある。

「保護者は、サイバーセキュリティに関する十分な情報や制御を持ち合わせていないのです。そのため、女の子は、安全にネットを利用するための監督を受けることなく、性的搾取や虐待を受けやすくなっているのです」

思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

2.3 教育

2.3.1 紛争の激化は、ウクライナの思春期の若者の教育にどんな影響を与えたか

ウクライナ、ポーランド、ルーマニアの思春期の若者は、2022年2月に紛争が激化して以来、教育が中断されている。それ以前の数年間でも、COVID-19パンデミックやオンライン学習への最初の移行により、多くの人が**教育の中断を経験**してきた。

紛争下における対面教育の実施

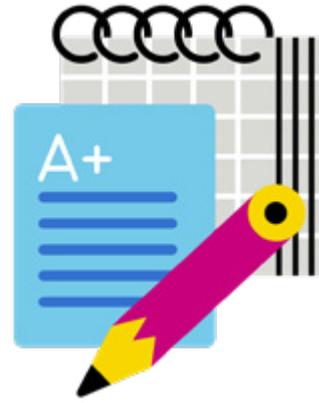
ウクライナの最前線あるいはその近くで暮らす思春期の若者にとって、校舎の破壊や転用に加え、身体的安全が脅かされる危険があるため、オンライン教育が唯一の選択肢となる場合も多い。ウクライナの西部と中部の学校は、避難所の新設や既存の避難所の強化など、安全に関する予防策を追加して再開した。しかし、避難所の収容能力に限りがあるため、学校は依然として安全な対面授業を提供するのに苦労している。

ウクライナの思春期の女の子は、砲撃の直接的な脅威によって引き起こされる身体的安全へのリスクが、いかに教育的経験に影を落としているかを説明した。ウクライナで活動する国際NGOと地元CSOの代表は、これらの地域の思春期の若者にとって教育の最大のリスクは、砲撃の絶え間ない恐怖であることを示唆した。

「対面で学んでいる女の子や男の子は、避難所に行かなければならず、そこで2時間から5時間も学ばなければなりません...今後数カ月、あるいは数年後には、精神的な状態によって中途退学に追い込まれる危険性があります」

国連機関代表、男性、ウクライナ

思春期の女の子全体が、対面教育のリスクについて懸念を表明した。15～19歳の女の子は、年下の女の子よりも、戦火の中でのオンライン教育の複雑さを懸念し、学習の質を損なうと考えていた。こうした女の子は、キーウやリヴィウのような比較的「安全」だと思われる都市での対面教育を好む傾向が見られた。彼女たちは特に、学習と社会化のための直接的な交流の重要性を強調した。



「少なくともキーウやリヴィウのような安全な都市では、リモート教育が導入されると、教育の質が更に悪くなる可能性があります。比較的安全な場所にいることができるのであれば、対面教育を導入し、教師と学生、大学であれば学生と生でコミュニケーションをとる練習をすることが望まれます。その方が安心して質の高い教育を受けることができるのです」

Solomia、女の子、15-19歳、ウクライナ

年齢、ジェンダー、国を問わず、紛争の影響を受けた思春期の若者は、学校に戻り、クラスメートと再会し、再び「普通」を体験できる瞬間を待ち望んでいる。

「ただウクライナに帰りたい。前の学校に戻って友達に会いたい」

Nadiya、女の子、10-14歳、ルーマニア

オンライン教育の課題

ウクライナの思春期の若者は、紛争の激化に伴うオンライン学習への移行が、学習と社会的つながりの両方に大きな影響を与えたと説明した。

「もちろん、紛争が激化してから教育は変わりました。昔は学校に通っていたし、みんな学校の友達があった、でも、遠隔教育に変わったの。私たちの間のコミュニケーションはずいぶん少なくなりました」

Daria、女の子、10-14歳、ウクライナ

思春期の若者を支援するCSOの職員は、オンライン教育の必要性から、学校での定期的な対面での交流が不足し、ウクライナの思春期の若者の重要な社会化の機会が奪われているという重要な懸念を強調した。

若い思春期の若者(10~14歳)は、重要なコミュニケーション能力やコミュニティとのつながりを失う危険性が特に高いと考えられた。

ウクライナの最前線あるいはその近くにいる女の子にとって、オンライン教育は対面授業よりも安全かもしれない。だが、彼女たちは、爆弾に対する**不断の不安**と**恐怖に学習が大きく影響を受け、注意散漫になり、やる気を失いかねない**と報告した。彼女たちはまた、**学習する上で直面する現実問題、特に家に電気が通らない期間があること**についても話し合った。

「不安を抱えながら、毎日全校生徒と地下室に駆け込んで勉強するのは本当に大変なことです」

Alyona、女の子、10-14歳、ウクライナ

「宿題をするのも大変でした。私の家では、夕方になると全ての電気が消え、長い間電気がありませんでした。今でも時々あります。こんな状況では、誰ともコミュニケーションをとれません」

Myroslava、女の子、10-14歳、ウクライナ

女の子は、オンライン学習には高度な自己規律と管理能力が要求されるため、やる気を失いやすいと報告した。また、ウクライナの全国的なオンライン教育プラットフォームでは、質の高いリモート学習に必要なコミュニケーション・ツールやコラボレーション・ツールが限られており、教師や仲間とのやりとりは主にメールやチャットに頼っているという。女の子は、ホワイトボードや仮想クラスルームの使用はあまり効果的ではないと指摘した。このような制限のため、多くの生徒が教師とのコミュニケーションは困難であると述べている。

「オンライン学習では明確さが大幅に欠けていることに気づきました。対面で受けた教育の方がずっと良かったと感じることがよくありました。先生と直接対話できることは大きな違いであり、授業をより効果的に理解するのに役立ちました。また、先生が前と同じような教材を提供できているとも思いません」

Tatyana、女の子、10-14歳、ウクライナ

障害のある思春期の若者を支援するNGOやクラスターの代表は、オンライン学習による限られたコミュニケーションが、障害のある女の子や男の子にとっていかに困難であるかを指摘した。

「障害、特に精神障害のある思春期の女の子は、オンライン授業に参加することや、機器やオンラインプラットフォームを使用することさえ、かなり困難です。対面での対話に比べ、オンラインプラットフォームでは、教師はこうした子どもをケアすることができません」

思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

ウクライナの思春期の若者を支援するCSOの職員は、思春期の若者の教育が継続的に中断されることで、高等教育や職業への移行に長期的な影響が出るのではないかという懸念を強調した。これは、特に年上の思春期の若者にとって懸念事項であり、彼らは教育の重要な節目を迎え、職業上の機会に影響を及ぼす可能性が高いからである。

「調査データはありませんが、専門家の主観によれば、学業成績と教育の質はおそらく50%低下したと思います」

思春期の若者を支援するCSO代表、ウクライナ

教育に対する社会経済的・交差的障壁

オンライン教育は、機器、電気、インターネット接続へのアクセスに大きく依存する。生徒が一貫してアクセスできない場合、課題を完了させるために、教師には、より柔軟なアプローチが求められる。思春期の女の子は、避難生活を強いられ、家族が生計を立てられなくなったために直面するアクセス上の課題について話し合った。

「避難していた数ヶ月間、学校に通うことができませんでした。ノートパソコンもインターネットもありませんでした。私たちは全てを置いてきました。何も残っていませんでした」

Hanna、女の子、15-19歳、ウクライナ

このような状況にある家族の多くは、限られた財源の中で、ノートパソコンやタブレット端末のような新しい技術機器を購入するよりも、差し迫ったニーズを優先している。必要不可欠なテクノロジーや安定したインターネット接続の確保は、社会経済的に余裕のない家庭の思春期の若者にとって特に困難であると報告されている。ロマ・コミュニティの思春期の若者を支援するCSOの職員は、限られたアクセスと、女子教育を軽視する一般的な規範とが相まって、学習に対する多層的な障壁を作り出していることを強調した。



Lea(16歳)はIDPの女の子で、祖母と話している、ウクライナ。
写真クレジット: Mishchenko Mikhailo, © Plan International

「ロマの家族の75%は... ノートパソコンやコンピュータのような機器を家に持っていません。女子教育に対する伝統的な考え方もあり、このような状況でロマの女の子がどうやって学校にアクセスできるというのでしょうか」

ロマの思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

2.3.2 移住は思春期の若者の教育にどんな影響を与えたか

ポーランドとルーマニアの難民の女の子は異なる言語、教育課程、提供される学業支援のレベルに**適応**することを含め、新しい教育制度に切り替えることの難しさについて述べた。しかし、思春期の女の子と男の子は、受け入れ国の教育制度に従うことの利点も述べた。

新しい教育制度への参加における挑戦と機会

ポーランドの思春期の女の子は一貫して、言葉の壁が困難であると報告しており、それがポーランドの教育制度に溶け込むことや学業成績に影響を及ぼしている。

「ポーランド語がわからないので、成績は悪いです。ポーランド語を頑張りましたが、Fでした。嬉しかったのは、英語の先生だけが優しかったことです」

Yuliia、女の子、10-14歳、ポーランド

「ポーランドに来てから成績がとても悪いです。特にポーランド語を一生懸命勉強していますが、成績は全てFです」

Alexandra、女の子、10-14歳、ポーランド

思春期の若者はまた、ポーランドとウクライナの学校制度の違いが、彼らの統合を難しくしたと報告している。

どちらの制度にも、初等、中等、高等の3段階がある。しかし、ポーランドの制度には、次の段階に進むための成績の条件がある。ウクライナの思春期の女の子は、要求される学業成績を満たすのに**苦勞**することが多く、次の学校段階に**進めない**と報告している。

ポーランドの難民の女の子は、教科書や教材が**ウクライナ人の生徒が利用しやすいように作られていない**ことも報告している。

また、教師から支援を受けるというより、ポーランドのシステム要件を満たさなければならないことに圧力やストレスを感じているとの報告もあった。

「話題が理解できないし、先生も厳しいから、質問しに行けません。とても感情的になるから、休み時間に先生を訪ねて、もう一度説明してもらおうことも頼めません。先生に声を荒げられると、ヒステリーを起こしてしまうんです。数学の問題を5つ解こうとしましたが、まったく理解できませんでした」

Daria、女の子、10-14歳、ポーランド

「先生のなかには...私をあまりよく扱ってくれない人もいます。ある先生は私に無礼だったから、私は自分の境界線と自分自身を守れるように対応することを学びました」

Polina、女の子、10-14歳、ポーランド

ルーマニアの難民の女の子も同様の困難を抱えている。政府の規則により、2023年5月1日以降、ウクライナからの難民の思春期の女の子と男の子は、財政援助を受ける資格を得るために、国の教育システムに登録することが義務付けられている²⁷。しかし、十分な語学力と改善するための政府の支援がなく、難民の女の子は授業についていけないと報告している。ウクライナからのリモート学習を続けているとの報告も多く、受け入れコミュニティの定期的な社会的交流から更に孤立する可能性がある。子どもの教育が中断されず、経済的支援の資格基準が満たされるようにするため、ウクライナ政府のオンライン学習プラットフォームとルーマニアの国立教育システムの両方に子どもを登録したと報告する保護者もいる。

「ママは私をルーマニアの教育制度に入れたがっている。でも、ここの学校には行きたくない。言葉がわからないから何もわからないのです」

Elina、女の子、10-14歳、ルーマニア

ルーマニア語への適応の難しさとは対照的に、ルーマニアでこの調査に参加した思春期の若者の多くは、ルーマニアの教育制度を通じて質の高い英語プログラムを利用できる利点を強調した。

「言葉の壁はありましたが、英語を学ぼうという決意がそのギャップを埋めてくれました。新しい環境での交流は、最初は大変でしたが、すぐに語学力を向上させ、新しい教育文化に適応する機会になりました」

Katerina、女の子、10-14歳、ルーマニア

保護者は思春期の若者の教育に長期的な影響が及ぶことを恐れる

ポーランドとルーマニアの保護者もまた、教育制度を切り替えることによる思春期の若者の学習への影響について懸念を表明し、万が一ウクライナの制度に戻った場合には困難が予想されるとしている。

「最初は、女の子も男の子もリモート教育を受けていました。その後、ポーランドのウクライナ人学校に通いました。今はポーランドの学校に通い始めています。彼らの語学力は不十分ですが、ウクライナの学校は日に日に少なくなっています。私の子どもはこの1年半の間に3回も教育課程と学校を変えました。彼らが何を学んでいるのか、本当に学んでいるのか、私たちにはわかりません。いつかウクライナに戻っても、彼らがそのシステムについていけるかどうかはわかりません」

女性保護者、ポーランド

ルーマニアで暮らす保護者もまた、思春期の若者が2つの制度の狭間に置かれ、どちらかの制度に認められないかもしれない資格や証明書の取得に力を注いでいるのではないかと心配している。

「ウクライナの学校にもルーマニアの学校にも認知されていない、無資格のルーマニア語クラスを提供するハブがあります。言語証明書を取得するためには、女の子も男の子もウクライナ語のクラスに登録しなければなりません。こうしたハブや学校の数も日に日に減っています。では、私たちの子どもはどうやって言葉を学び、教育制度に溶け込むのでしょうか」

女性保護者、ルーマニア

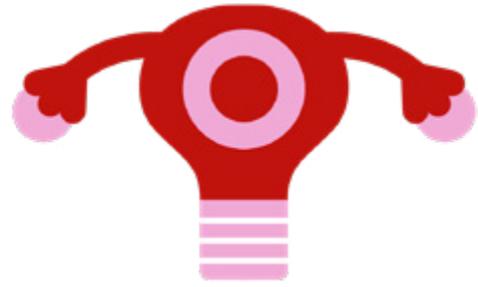
保護者は特に、15～19歳の年上の思春期の女の子が、受け入れコミュニティの教育の質が悪く、学業面で著しく遅れをとることを懸念していた。これは、彼女たちの高等教育の機会や進路に悪影響を及ぼすと懸念している。

しかし、ルーマニアの一部の保護者は、将来の不透明さと、ピアツーピアのコミュニケーションや社会化スキルなどが、思春期の若者のウェルビーイングに好影響を与える可能性の両方を考慮すると、新教育制度への参加は重要であると考えていた。

「私の子どもはルーマニア語を学ぶ必要性を感じていません。娘は『ルーマニア語を学んでどうするの？ウクライナに帰らないの？ウクライナの学校に行きたい』って。娘の気持ちはわかります。でも、将来はわかりません。帰れないかもしれないと伝えるのは難しい。だからこそ、彼らは言葉を学び、溶け込む必要があるのです」

女性保護者、ルーマニア

2.4 SRHR



2.4.1 紛争は思春期の若者の性と生殖に関する健康 (SRH)にどんな影響を与えたか

思春期の女の子は、年齢を問わず、SRHについての情報やサービスにアクセスするのが困難であると報告した。これには、**限られた性教育の提供や、家庭でのSRHR問題に関する対話の制限が含まれる**。こうした問題の多くは、紛争が激化する以前から存在しており、現在ではアクセスが一層制限されている。

SRHRサービスへのアクセスにおける課題

ウクライナでは、CSOの職員が、紛争による病院や診療所の破壊、資源の制約、医療制度の混乱により、国営のSRHRサービスへのアクセスが制限されていると報告した。特に避妊や家族計画サービスへのアクセスが制限されている。また、薬局の閉鎖、施設の損壊、サプライチェーンの途絶などにより、前線に近いまたは前線での緊急避妊の提供やレイブサバイバーの臨床管理へのアクセスにも問題があることが報告された。国の病院や診療所によってSRHRサービスが無料で提供されている地域では、多くの女性と女の子が、予約のための待ち時間の長さなど、依然としてアクセスへの大きな障壁に直面している²⁸。

ロマ・コミュニティの女の子を含む社会的に疎外された集団は、経済的な制約がSRHRサービスにとってさらなる障壁となっている。ロマ・コミュニティの思春期の女の子を支援するCSOの代表は、彼女たちが利用できる無料のサービスに関する知識が不足しているため、既に限られているSRHRサービスを受け損なう可能性が特に高いことを強調した。CSOの代表によれば、ロマ・コミュニティの思春期の女の子は、同世代の女の子に比べて学校への出席率が低いため、学校でSRHRに関する情報を得たり、どこでサービスを受けたりできるかを知る機会を逃している。

ポーランドとルーマニアにおけるSRHRの制限

ポーランドでは、避妊や中絶へのアクセスを含む、SRHの最近の後退²⁹が、難民とホスト・コミュニティの女の子の両方にとって、これらのサービスを利用するための主な障壁となっていると、現地のCSOとNGOの代表から報告された。間もなく改正されるとの見方もあるが、ポーランドの中絶法は現在、欧州連合 (EU) で最も制限的な法律のひとつである³⁰。

ポーランドでは、年齢を問わず多くの女の子が、国からもNGOからも、無料のSRHRサービスに関する情報を受け取っていないと答えた。ポーランドの15～19歳の思春期の女の子で、SRHRサービスを知っていると答えた人はわずかであった。しかし、彼女たちは、予約のための長い待ち時間や、個人クリニックが高額であるために、こうしたサービスを利用することが困難であることを強調した。

「SRHRに関するサービスについては全然知りません。今まで何も情報ももらっていません」

Tanya、女の子、10-14歳、ポーランド

「SRHRの相談だけでも200PLN*はします。基本的な生活に必要なお金もほとんどないのに、どうやって相談できるんですか」

Maria、女の子、15-19歳、ポーランド

ルーマニアでは、中絶は妊娠14週未満までのみ法律で認められている。2021年以降、ルーマニア政府が避妊補助金と性教育への資金提供を停止したため、診療所が閉鎖され、SRHRサービスも後退した³¹。

紛争が月経の健康に与えた影響

女の子は、危機や避難生活を送ることが、月経を含む身体の健康に与えた影響について述べた。

* 訳注: PLN(ズウォティ)。ポーランド通貨。2024年7月現在1PLN=約40円

「同時に、月経が数カ月止まってしまい、ストレスが更に増しました。これらの変化に加え、サイズが合わなくなった服を小さなスーツケースに入れて逃げなければならなかったことで、全てがより困難なものとなりました」

Nastya、女の子、15-19歳、ウクライナ

危機下で月経に対処することは、そのストレス自体が月経の規則性や程度に影響を与える可能性があり、女の子の日常生活やウェルビーイングに多大な影響を与える可能性がある。

「いつも生理が始まる前にひどい生理痛に襲われます…。生理不順のせいで、生理がいつ始まるかもわからず、生理中は何も予定が立てられません」

Ivana、女の子、15-19歳、ウクライナ

ウクライナで紛争が激化して以来、女の子が月経用品や月経サービスを利用するのに影響を及ぼしている主な要因として報告されたのは、女の子の居住地と経済的困窮であった。特に最前線にいる女の子にとっては、物理的な安全に対する懸念もアクセスへの障壁として挙げられた。ウクライナの思春期の若者を支援するNGO職員は、IDPsの女の子や地方の女の子もSRHRサービスへのアクセスに問題を抱えていると報告した。

「紛争が激化してから、砲撃を受けている地域や最前線に住んでいる女の子には、水道やお湯さえありませんでした。薬局も閉まっています、月経用品を手に入れることも全くできませんでした。彼女たちの多くは、古いベッドリネンやカーテンを使って月経用品を自作する方法を、いくつかのアプリで調べていました」

思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

施設に入所している女の子は、職員が相談を行わないため、月経用品に関してほとんど選択肢がないと言われている。ウクライナで脆弱な思春期の若者を支援しているCSOの職員は、施設の職員や管理職のSRHR全般に関する知識や意識にギャップがあり、伝統的な見解やタブーがしばしば支配的であることを指摘している。

「施設に入所している女の子は、施設が提供する月経用品なら何でも手に入れることができます。でも、彼女たちは、自ら好きな製品を選ぶためのお小遣いを持っていません。施設長の中には、タンポンの使用に関して誤った知識を持っている者もいます。彼らの多くは30~40年以上同じ施設で働いているため、古いステレオタイプを持ち続けています。そのため、例えば生理用ナプキンだけを女の子に提供していたりします」

思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

同様に、ウクライナのCSOスタッフは、月経用品の使用に関するステレオタイプや誤情報が保護者の間にも蔓延していることを報告した。ウクライナの年上の思春期の女の子は、月経カップや生理用下着といった製品について保護者の認識が低いことや、タンポンの使用は処女性に影響すると保護者の間で信じられているなど、誤解が根強いことも強調した。

「性教育のアンケートで同じような質問をしたことを思い出したのですが、何人かの女の子は、まだ処女のうちにタンポンを使うのはよくない、健康に悪い影響がある、性交渉の前にはタンポンを使ってはいけない、と母親から聞かされているので、もっぱらナプキンだと答えていました」

思春期の若者を支援する地元CSO、ウクライナ

ポーランドとルーマニアの女の子も、特にウクライナで使用したことのある月経用品は種類が少なく、また言葉の壁や経済的な制約もあるため、月経用品を入手することが困難であると報告している。

「月経が始まったばかりの女の子は、助けを求めるのが難しいです。例えば、学校で生理が起こった場合、言葉の壁があるため、どうしたらいいのか聞くことができません。ポーランドでは、月経用品の入手はウクライナほど開かれています。学校のトイレには紙がありますが、残念ながらナプキンやタンポンはありません」

Christie、女の子、15-19歳、ポーランド



2.4.2 紛争は思春期の若者のSRHRに関する包括的な情報の入手にどんな影響を与えたか

10～19歳の思春期の女の子と国際NGOや地元CSOの代表者によると、ポーランド、ルーマニア、ウクライナの3カ国では、性と生殖に関する医療と性と生殖に関する権利の実現に問題があるという。

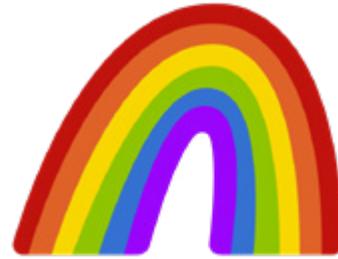
SRHR情報の入手を制限する根強いタブー

フォーカス・グループやインタビューでSRHRについての議論は、調査対象となった3カ国全てにおいて、思春期の若者や保護者がしばしば躊躇するものであった。女の子は、この話題に対するタブーが、思春期の若者がSRHRに関する包括的な情報を入手することを制限し、有害な神話を根付かせると説明した。また、セックスの話題は家庭で避けられることが多いという報告も多かった。彼女たちは、保護者と性の健康について議論するのは難しいと述べている。

正確なSRHR情報と質の高いサービスへのアクセスを可能にする上で、保護者と家族環境の役割は大きい。しかし、避難家族を支援するCSOの職員は、SRHサービスに関連する否定的な姿勢により、保護者が特に女の子のために専門家の助けを求めることを避ける可能性があることも強調した。こうした態度は、思春期の若者がこうしたサービスを利用することにスティグマを抱かせるような社会規範や誤情報によって引き起こされている。

「私たちのパートナーのソーシャルワーカーは、14歳の思春期の女の子を含む家族を、婦人科医の定期検診に連れて行こうとしました。しかし、彼女の母親は同意を強く拒みました...母親は、娘が婦人科に行けばレイプされたと他人に思われることを恐れていたのだと思います」

思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ



思春期の若者が受けるCSEは限られている

「学校で、まだ性教育を受けていません」

Tamara、女の子、10-14歳、ウクライナ

ウクライナの10～14歳の女の子の多くは、学校で包括的性教育(CSE)を受けていないと報告しており、これは国の教育制度にずれがあることを示している。ウクライナの思春期の若者を支援しているNGOやCSOの職員は、CSEにおけるこのずれは、紛争が激化する以前から存在し、その後悪化していることを強調した。これは、オンラインでの質の高い性教育の提供が困難であることが大きな原因である。思春期の若者が一般的にオンライン教育を受ける際に直面する障壁に加え、このデリケートな話題の扱いに消極的であるため、カリキュラムの中で優先順位が下げられたおそれもある。

「性教育は常に制限されていました。でも、以前は内容の方が問題でした。今、オンライン教育にアクセスすることが困難な女の子や男の子は、性教育にアクセスすることも同じように困難です。だから、(それは)更に悪化しています」

思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

ウクライナの思春期の女の子の中には、「健康、安全、ウェルビーイング」というコースでSRHRを学んだと報告した子もいる。だが、Katalinaのような女の子は、このコースでは十分な情報が得られなかったと感じていた。

「健康、安全、ウェルビーイングについての学校の授業があり、その中に月経についての情報もありましたが、ごく限られたものでした」

Katalina、女の子、10-14歳、ウクライナ

ウクライナの10～19歳の思春期の女の子、およびウクライナの全国的なオンライン教育システムに従っているポーランドとルーマニアの女の子によると、性教育は学校のカリキュラムにはあるものの、13～14歳の8年生の生物学の授業に導入され、教わる時期が遅いのだという。

「SRHRは生物の授業のテーマのひとつでした。しかし、私たちの先生はこれを省略しました。ほとんどの先生は、生物学の授業中にごく限られた情報を与えることさえ避けています」

Yuliya、女の子、15-19歳、ウクライナ

15～19歳の女の子は、SRHRの情報はしばしば省略されるか、非常に限定されるか、あるいは偏った伝統的な方法で提示されると付け加えた。女の子は、教科書にレイプのサバイバーを非難するような有害な内容が含まれている例があることを報告した。

「教科書には、加害者を正当化する一方で、サバイバーを非難する箇所がありました。女の子や男の子が暴力に遭ったときの対応や、誰かに暴力を振るうことを避けることを教育するための記述が何もありませんでした」

Klaudia、女の子、15-19歳、ウクライナ

現地のCSO代表は、性とセクシュアリティに関する有害なステレオタイプや規範を助長するだけの現在の性教育によって、思春期の若者の健康とウェルビーイングに悪影響が及ぶかもしれないという懸念を表明している。

「ウクライナ社会には、性教育に関するある種のステレオタイプが残っています。これが思春期の女の子のアクセスを妨げており、特に保護者が根深いタブーのためにこの問題についてオープンに話し合わない場合はなおさらです。更に、教師や、時には心理学者でさえ、思春期の女の子にこれらについて話したり、情報を提供したりしたがりません」

思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

ポーランドでは、難民の女の子もCSEを受けることに制限があることを報告しており、年上の思春期の若者は、ポーランドの教育制度に移行して以来、SRHRの授業を受けていないと述べている。

思春期の若者のSRHR情報源

10～14歳の女の子によれば、SRHRに関する主な情報源は、母親または女性の保護者であり、次いで同世代の女の子であった。思春期の女の子の中には、家庭でこの話題について沈黙を経験し、このような会話を始めることに抵抗があると報告した。また、女性の保護者は危機のために多くの責任を負わなければならない、こうした問題について話し合う時間が少ないと説明する人もいた。女の子は代わりに仲間に情報を求める。対照的に、年上の思春期の女の子は、ソーシャルネットワークやオンラインプラットフォームを通じて、主にオンラインで情報にアクセスすると報告した。紛争の激化以降、こうした情報源が変わったかどうかについては、ほとんど議論されなかった。

「SRHRの知識は、ソーシャルネットワークと本で得ました。ソーシャルネットワークには、本当に優れた性科学者がいて、情報を提供してくれるんです」

Svitlana、女の子、15-19歳、ウクライナ

「自分の身体に起こる変化について知るために、ウェブサイトやソーシャルメディアなどネット上の情報源や、時には本を見ることがほとんどです」

Maria、女の子、15-19歳、ポーランド

ウクライナの10～14歳の男の子の回答も、SRHRの十分な情報へのアクセス不足を示している。一部の男の子は、情報を公式なルートからではなく逸話的に得ていると報告しており、これは構造化されたCSEやコミュニケーションの欠如を反映している。

「あちこちで。SRHRについて話す人がいれば、そこで情報を得ます。他の方法は何もないです」

Octavian、男の子、10-14歳、ウクライナ

一方、年上の思春期の男の子の中には、オンライン情報にある誤情報を見分けるのが難しいという意見もあった。

「SRHRの情報を見つけるのは全然難しくありません。でも、何が正しくて、何が間違っているのかを理解するのは、しばしば混乱します」

Vlad、男の子、15-19歳、ウクライナ

同様に、ルーマニアの思春期の男の子は、インターネットで情報を探していると報告した。彼らはまた、保護者に話すとも述べたが、これは彼らの関係の親密さや、彼らが恥じることなくオープンにコミュニケーションできると感じるかどうかにかかっていると説明した。

「多分、大半の家庭でこの話題を話すことはないだろうし、子どもも尋ねるのは気まずいから、このような授業が必要です。だから、制度的な観点から考えるなら、少なくとも10年生、9年生では、(女の子も男の子も)理解できるような授業が必要だと思う」

Ivan、男の子、15-19歳、ルーマニア

更に、ルーマニアの15～19歳の男の子は、父親や家族や身近な人の中の男性に話す方が、女性よりも快適であると答えた。だが、戒厳令のため男性の保護者や家族が徴兵されたため、主要な情報源を失った男の子も多く、誤情報に脆弱になっていると報告されている。

「いつでも母さんのところに行って、『あれと、これについて教えて』なんて言えません。それに、男にとっては、はたから見るととても変なことなんだ。親、特に母親に何かを尋ねるのは。父さんとはまた別のことで、男が男に話すことだから」

Oleg、男の子、15-19歳、ルーマニア



2.5 思春期の若者とジェンダー規範

2.5.1 危機は思春期の女の子と男の子の経験にどんな影響を与えているのか

3カ国のFGD参加者は、**思春期という人生の重要な時期の経験が、紛争の激化によりどう影響されたかを議論した。彼らや他の関係者は、ジェンダー規範がどのように彼らの経験を形作っているのか、そして危機の結果、こうした規範がどのように変化したのかを強調した。**

大人の責任の増大

ウクライナ、ポーランド、ルーマニアでは、年齢を問わず、多くの思春期の女の子が、紛争激化以来、家庭構造や力関係が変化し、家事に対する責任が増えたと報告している。戒厳令と軍隊への徴兵の結果、父親や他の成人男性家族は多くの家庭からいなくなった。追加的な家事や大人の責任の負担は、男の子よりも女の子に重くのしかかり、女の子は、女性の保護者をサポートするために、料理や掃除、弟妹の世話など、伝統的に女性に割り当てられていた仕事をする人が多いと報告されている。

「掃除と料理も私がやっています。ママは一日中働いていて、妹はまだ小さくて何もできない。だからママの手伝いをするんです」

Natalie、女の子、15-19歳、ウクライナ

ひとり親世帯、特に働く母親の世帯の女の子は、弟妹の世話や家事の負担を負っていると報告した。ポーランドとルーマニアの思春期の女の子も、ウクライナの同世代の女の子と同様に、世話をする役割を含む、より大人としての責任が日々の重要な一部となっている。保護者はまた、難民の女の子の中には、家族の収入に貢献するためにパートタイムの仕事に従事している者もいると報告した。

「私は母の家事を手伝うことに慣れていました。父がいないので、母と私しかいない。母が働いているときは、私が掃除や料理をしています」

Olya、女の子、10-14歳、ポーランド

10～14歳の思春期の男の子も、紛争激化が彼らの時間の使い方や家庭内での役割にどう影響したかを語っている。彼らは、子ども時代から、ジェンダーに強く規定された大人の役割を担うようになるという劇的な移行を経験したと述べており、父親や兄がいない中で家族の面倒を見なければならないという義務感を感じていると話す者もいた。

「紛争が子ども時代を奪い、恐ろしい大人の世界に置き換えてしまったみたいだ」

Dmytro、男の子、10-14歳、ウクライナ

伝統的なジェンダー役割に対する認識の変化

紛争が激化したことで、思春期の若者は伝統的なジェンダーの役割分担を強化され、危機下でより多くの大人の責任を担うことに対する期待や必要性を経験することになったが、「通常」の生活の混乱がジェンダー役割や態度の変化に貢献したという指摘もある。Emiliyaが述べたように、日常生活に男性の不在が、ジェンダー規範によって伝統的に男性に割り当てられてきた役割を、女性に追加で担わせることになった。

こうしてEmiliyaは、**ジェンダー規範や役割は社会的に構築されたものであり、女性の能力を正しく反映してはならず、むしろ女性の可能性を制限するものであることを、より広い社会と女性自身に示した**のである。

「...今では、多くの男性が前線に行き、市民生活の大部分は女性に委ねられています...そしてこのことは、女性が自らの自立と行動力に気づくのに役立つと思います」

Emiliya、女の子、15-19歳、ウクライナ

Angelinaもまた、紛争激化により、女性が伝統的なジェンダー役割に沿わない責任を負わざるを得なくなったことを説明した。しかし彼女は、この追加の負担は、多くの女性に挑戦をもたらしていると述べた。

「ウクライナでは多くの女性が専業主婦でした...突然全てが変わり、軌道から外れてしまいました。40歳になって初めて働きに出るのですから、とても大変で、挑戦です」

「それはこれまで男性がやっていたもう半分です。私たちの社会では、男性が守り手です。男性が守ってくれるのに、ここでは...女性が守り手であり、母親であり、あらゆる役割を果たさなければなりません。とても大変だと思う」

Angelina、女の子、15-19歳、ウクライナ

調査対象3カ国全体で、思春期の女の子は、社会のジェンダー化された期待や、それが女の子にも男の子にも与えられている選択肢や経験にどう影響しているのかについて、はっきりと認識していた。参加者は、女性性や男性性という伝統的なステレオタイプが浸透していることが、自身の性自認に沿わない伝統的な役割や責任を堅持するよう圧力を感じるトランスジェンダーやノンバイナリーの人にもどう影響するかについて議論した。

「私たちの国では...実は、社会にはまだ性差別が、かなりたくさん残されています。私たちはまだ、男の子には誰も何も指図しないという事実慣れていて、男の子は好きなように生きている...女性が自分で自分の望みを決められるとは限らない。特にユース女性や女の子は、この図式に合わせるよう強要されます。それはとても強いです」

Daryna、女の子、15-19歳、ウクライナ



アニメのワークショップに参加するウクライナの思春期の若者、ワルシャワ、ポーランド。

写真クレジット: TKaczor © Plan International

事例研究3:ウクライナのInna

Innaはウクライナのキーウ近郊に住む15歳の女の子だ。彼女はロマ・コミュニティの一員であり、紛争が激化する前に地元の音楽学校で学んだ音楽への情熱を持っている。Innaは、2022年2月以前の彼女の生活は喜びに満ちていたと語った。学校に通い、親しい友人と過ごし、趣味や音楽への愛を探求することを楽しんでいた。

しかし、紛争の激化とともに、彼女の生活は一変した。「今は毎日が予測不可能です。サイレンの音は、私たちの生活の怖いサウンドトラックのようなものです」と、彼女は爆弾への絶え間ない恐怖が日常の一部となっていることを振り返った。家庭内も同様に厳しい状況だ。Innaは、彼女の家族が常に警戒態勢にあることを説明した。「家の中にいても、もう安全だとは感じません。サイレンの鳴り止まない夜が一番つらいです」

紛争は彼女の社会生活にも打撃を与えた。「前は放課後、友達と笑って遊んでいました。今、多くの友達が去り、毎日寂しいです」。Innaと彼女の友達はソーシャルメディアのプラットフォームを通じて友情を維持しようとしているが、それは彼らが一緒に過ごした質の高い時間の代わりにはならない。

このような困難の中で、Innaは音楽に一時的な逃げ場を見つけるという。「ピアノを弾いたり歌ったりすると、一瞬紛争を忘れます。私の小さな平和の世界」。だが、厳しい学校生活と家事のため、音楽に費やす時間はほとんどない。「もっとピアノを弾く時間があればいいんですが…。でも今は、学校と家庭の仕事が私の時間を全て使ってしまうのです」

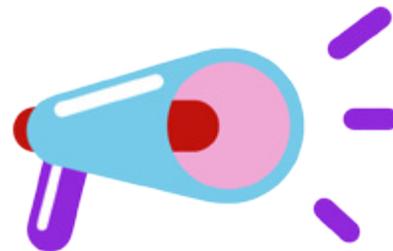
Innaはまた、この新しい生活が彼女の教育や安心感にどんな影響を与えたかについても語った。「オンライン授業と対面授業の両立が恋しいです。今、学校に行くのは毎日危険な旅をしているみたいです」と、ハイブリッド学習モデルから対面授業のみへの移行について語った。将来に目を向けると、Innaの願望は変化した。彼女は今、ウクライナの将来で重要な役割を果たしたいと考えている。「歌手になりたかったのですが、今は弁護士になって国を変えたいと夢見ています」。家族もそれを応援しているという。

ウクライナの紛争はInnaの人生を大きく変えた。「以前はのんきな10代でした。今は、普通の生活が戻ってくる日を待ち望んでいます」

歌手になりたかったのですが、今は
弁護士になって国を変えたいと
夢見ています。



2.6 思春期の若者の参加



2.6.1 思春期の若者はどう意思決定に参加しているのか

思春期の若者に、どう意志決定に参加しているのか、どうコミュニティに関与しているのか、そして紛争が激化して以来、それがどう変化したのかを尋ねた。彼らの回答は、彼らの生活に影響を与える意思決定のあらゆるレベルにおいて、**思春期の若者の声を取り入れることを促進することの重要性を強調した。**

世帯レベル

思春期の女の子と男の子は、家族の意思決定から切り離されていると感じていると報告した。一部の保護者は思春期の若者に相談していると答えたが、危機による転居の決定など、重大な問題についてはそうではなかった。そのような場合、一般的に思春期の若者は意思決定プロセスに含まれない。

「ぼくの決定に従うこともある。例えば、夕食にボルシチを食べたいと言うと、ボルシチを作ってくれる。でも、パパとママで決めることもあるんだ」

Yevgen, 男の子、10-14歳、ウクライナ

一部の思春期の若者は、ある種の問題は自身の関心や責任を超えたものだと考えていると報告したが、特に女の子は保護者とのコミュニケーションの問題について議論し、理解されない、あるいは聞いてもらえないと感じることがよくあると述べた。ウクライナの女の子は、主に彼らの予定について保護者から助言を受けると報告したが、これは保護者が働いている間、年上の子どもの下の子どもの面倒を見てくれることに依存していることと関連している可能性がある。

同様に、ポーランドでは、15～19歳の女の子が、家族の特定の決定について発言権があると答えたが、それは主に日常生活に関するものだった。彼女たちは、食事や余暇活動に関する希望をたびたび尋ねられると報告した。しかし、ウクライナを出国するかどうかのような重大な決定について、彼女たちが関与する頻度はかなり低い。

「大体、食事や家の中で猫を飼うことなどの決断を求められます。でも、ポーランドへの移転など、場合によっては聞かれないこともあります」

Aleksandra, 女の子、10-14歳、ポーランド

紛争による圧力、ストレス、不安のため、保護者は家族の福祉のために迅速な決断を下さなければならないことが多いと、家族を支援するNGO職員は報告している。これは、参加よりも行動が優先されるため、思春期の若者に相談することなく重要な決定がなされることを意味している。

「多くの保護者は、子どもに相談する余裕もなく、即座に重大な決断を迫られています。例えば、避難生活では時間がごく限られています。家族を救うためには迅速な対応が必要です。このような話題では相談できないのは理解できると思います」

思春期の若者を支援する現地CSO代表、女性、ウクライナ

意思決定への参加に影響を与える要因

既存の社会規範、偏見、差別もまた、思春期の若者の意思決定への参加に影響を与える。特に疎外された集団にとっては、思春期の若者を意思決定から排除することを常態化している慣習は、危機下で悪化する可能性がある。例えば、ウクライナのロマ・コミュニティを支援しているCSOの職員は、家父長的な態度や伝統がいかに意思決定を形作っているかを説明した。

「家父長的コミュニティである私たちの文化では、家族の決定は専ら男性か高齢の女性が行います。これは特別ではなく、多くの文化や少数民族が同様の構造を持っています」

ロマの思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

施設で暮らす思春期の若者にとって、自身の生活に関する意思決定から排除されることは、紛争が激化する以前の常態であった。彼らの声を無視する環境は、彼らの積極的な参加を阻む大きな障壁となっている。

「女の子や男の子は、医者や建築家になることを熱望しているのに、美容師の専門学校に通いなさいと言われる。施設に收容されているため、自身の将来を決定する機会を奪われているのです」

思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

LGBTIQ+コミュニティのメンバーなど、ステレオタイプや偏見に直面しがちな疎外された思春期の若者は、社会で存在が見えにくく、公で声を上げて反感を買うことを恐れるため、時には意思決定から排除されることもある。LGBTIQ+の思春期の若者を支援するCSOは、思春期の若者が恐れずに意思決定に参加できるようなルートや空間を設けることの重要性を強調した。

「LGBTIQ+の思春期の若者は、コミュニティではとても見えにくい存在です。15~19歳の彼らの大半は、ステイグマや差別のため、本当の自分を共有することを恐れています。しかし、LGBTIQ+の思春期の若者のための私たちの拠点では、彼らはかなり積極的に活動しています。彼らは意思決定に積極的に参加し、制度を利用するだけでなく、個人的にも毎日たくさんの提案をしてくれます」

LGBTIQ+の思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

ルーマニアでは、年上の思春期の男の子が、意思決定に参加する能力を強化したと感じる重要な要因について述べている。それは、16歳から働くことを認めている現地の労働法である³²。自立性が高まると同時に、彼らはお金を稼ぐことと権威、ひいては意思決定へのアクセスとを結びつけて考えていた。



2.6.2 紛争が激化して以来、思春期の若者はボランティアや活動にどう参加しているのだろうか

本調査により、ウクライナの思春期の女の子の間でボランティア活動の程度が異なることが明らかになった。ウクライナでは、紛争激化以降、年下の思春期の女の子がボランティア活動に参加することが増えたと報告されたが、ポーランドとルーマニアでは、女の子は言葉の壁、仲間からの圧力、やる気の欠如といった参加への障壁に直面している。

ウクライナでの女の子のボランティアと活動への参加

ウクライナの女の子は、手作りのプレスレットやフォーチュン・クッキーの販売による軍への募金活動や、高齢者や動物を支援するコミュニティでのボランティア活動など、紛争激化以来、ボランティア活動に参加していると報告した。年齢制限など、参加を阻む障壁を経験したとの報告もあった。

「年齢的に、ボランティアをする機会があまりなかったです。大概、ボランティア活動には、大人であることを要求されるので」

Natasha、女の子、15-19歳、ウクライナ

また、仲間からのいじめを恐れて参加に消極的になると説明する者もいた。

「最近、同様のいじめのせいで、女の子も男の子もとても不安で、自分がやりたいことをすると笑われるのではないかと常に考えているのだと思います。そして、その不安のために、彼らの多くは沈黙を守り、何事にも参加しないのです」

Anichka、女の子、15-19歳、ウクライナ

思春期の若者を支援するCSOの職員は、思春期の若者の参加の程度にジェンダー差があることを指摘し、一般的に、男の子より女の子の方がボランティア活動に積極的であると述べた。

「女の子の参加は多いが、男の子の参加はほとんどいません。男子は通常、こういったことのいくつかを無視しています」

思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

年上のLGBTIQ+の思春期の若者は、ウクライナのLGBTIQ+のコミュニティでボランティア活動やコミュニティ活動に積極的に参加し、そこで安全感と受容を見出していると報告した。

「彼らはコミュニティでかなり活発に活動しています。だから、彼らがこの場所への帰属意識を持つことはとても重要だと思う。それは場所ですらない。そう、そこにいる人たちなんです」

思春期の若者を支援する地元CSO、女性、ウクライナ

ポーランドとルーマニアにおける女の子のボランティアと活動への参加

ポーランドの年下の女の子は、ボランティアに参加するのに興味があるものの、参加する程度は比較的低かった。彼女たちは、課外活動に参加するための保護者からのサポートがないことや、言葉の壁が影響していることが多いと指摘した。ボランティア活動に参加する子は、手作り品の販売を通じて資金を得ることで、ウクライナのコミュニティを支援することに重点を置いていることが多い。

「ボランティアに参加したいんです。ママにずっとお願いしています。学校でタタール人の女の子と知り合って、私たちは絵を描いて売ることにしたんだけど...ママは、誰も私たちから買って欲しくないって言うんです。もう自分の中に引きこもって、絵を描かなくなりました。自分でも絵が下手だと思う」

Asya、女の子、10-14歳、ポーランド

対照的に、ポーランドとルーマニアの15~19歳の女の子は、全体的に、ボランティアや活動への参加への熱意が、年下の女の子よりも低いことが示された。他に優先すべきことがあると説明する女の子もいれば、Nataliiaのように燃え尽き症候群の症状を表し、努力が変化につながらないと士気を失うという女の子もいた。

「大抵の場合、ボランティアをする動機は、何らかの反応を得ることです。多くの場合、人はそれを当然だと思っています。何らかの反応が得られないと、やる気がなくなってしまうのです」

Nataliia、女の子、15-19歳、ルーマニア

2.7 未来へのビジョン



2.7.1 思春期の若者は、自身やウクライナの未来についてどんなビジョンを持っているのか

この調査では、思春期の女の子と男の子に、紛争後の未来像について尋ねた。彼らの回答は、復興だけでなく、より平等で包摂的なウクライナを創るという決意を示していた。この紛争で思春期の若者が直面した重要な課題の専門家として、ウクライナのより良い未来を実現するために何が重要なのかについての彼らの視点は、復興に向けた取り組みの中心になるべきである。

「ユースである私たちはウクライナの未来です。私たちは、国をより発展させる多くの分野に精通しています。ウクライナ、そして全ヨーロッパで国を代表するために、毎日前向きな姿勢を示すことで、自分自身と周りの人びとを向上させています」

Katerina、女の子、15-19歳、ウクライナ

3カ国全てで女の子が優先的に訴えたのは、ウクライナで失われたものを早急に再建することであり、思春期の女の子も男の子も、自身がウクライナの復興に不可欠な参加者であると考えていた。

「まずはすべてを再建する必要があります... そしてどうにかして、教育の問題を解決します」

Tatiana、女の子、10-14歳、ウクライナ

「多くの人が家や事業を失いました。再建と補償には長い時間がかかるでしょう。ウクライナの発展が最優先されるべきだということです」

Svitlana、女の子、10-14歳、ウクライナ

「私たちはこの国を再建し、更に良くしていきます」

Vadym、男の子、10-14歳、ウクライナ

ウクライナの未来に対する女の子のビジョンの中で際立っていたのは、単に再建するだけでなく、社会を改善するという決意で、これには、平等な権利と機会の獲得、汚職対策、特に疎外された集団に対する考え方や有害な規範の転換などが含まれる。

「より社会的な受容が進み、互いに対する偏見が少なくなる未来を願います」

Oleksa、女の子、15-19歳、ルーマニア

「ウクライナでは、障害者は常に目に見えない存在です...将来、ウクライナはもっと包摂的であらゆることに理解がある国になると信じています...。まだ遅くはあるかもしれないが、将来的には高い包摂性を達成するでしょう」

Olga、女の子、15-19歳、ウクライナ

女の子は、ウクライナが紛争から立ち直るためには、MHPSSの提供が必要だと強調した。

「私は心のウェルビーイングを選びました。皆がそこで経験について誰かに話せるように、私たち一人ひとりに心理士が必要だと思うし、紛争後のコミュニケーションの増加も必要だと思う」

Solomiya、女の子、10-14歳、ウクライナ

ポーランドとルーマニアにいる難民の女の子にとって、彼女たちが思い描く将来像は、彼女たちがどこに住むかを問うものである。多くはウクライナに戻りたいと強く望み、家族や友人、紛争激化以前の生活が恋しいと語る。

「キーウに戻る。紛争が終わったら、キーウに戻って働きます」

Oksana、女の子、10-14歳、ルーマニア

一部の女の子は、統合の難しさに直面しながらも、自身の未来を築くために受け入れ国に留まりたいと語った。この望みは、多くの場合、ポーランドやルーマニアをヨーロッパやEUと結びつけて考えていることと関連しており、彼女たちは、このことが機会へのアクセスに有利だと考えている。

「私はここの社会の一員だとは思っていないけど、ウクライナでの将来は考えていない。ポーランドでの生活を続けたい」

Zhenya、女の子、15-19歳、ポーランド

「ウクライナに戻るつもりはないし、ヨーロッパに残りたいです。ヨーロッパの方が質の高い教育が受けられるし、生計を立てる機会もあると思う」

Irina、女の子、10-14歳、ルーマニア

同様に、ルーマニアにいる難民の男の子の何人かは、恵まれた機会と高い給料のために、ルーマニアや他のヨーロッパ諸国で勉強したり働くことを好むと説明した。だが、彼らは最終的には祖国ウクライナに帰りたいとも考えている。

「多くの人に機会があるはず。ヨーロッパの扉は今、開かれている。だから、ここで暮らして働くこともできるし、ここで教育を受け、ウクライナに戻ることもできる。ヨーロッパの学位は必ずプラスになるさ」

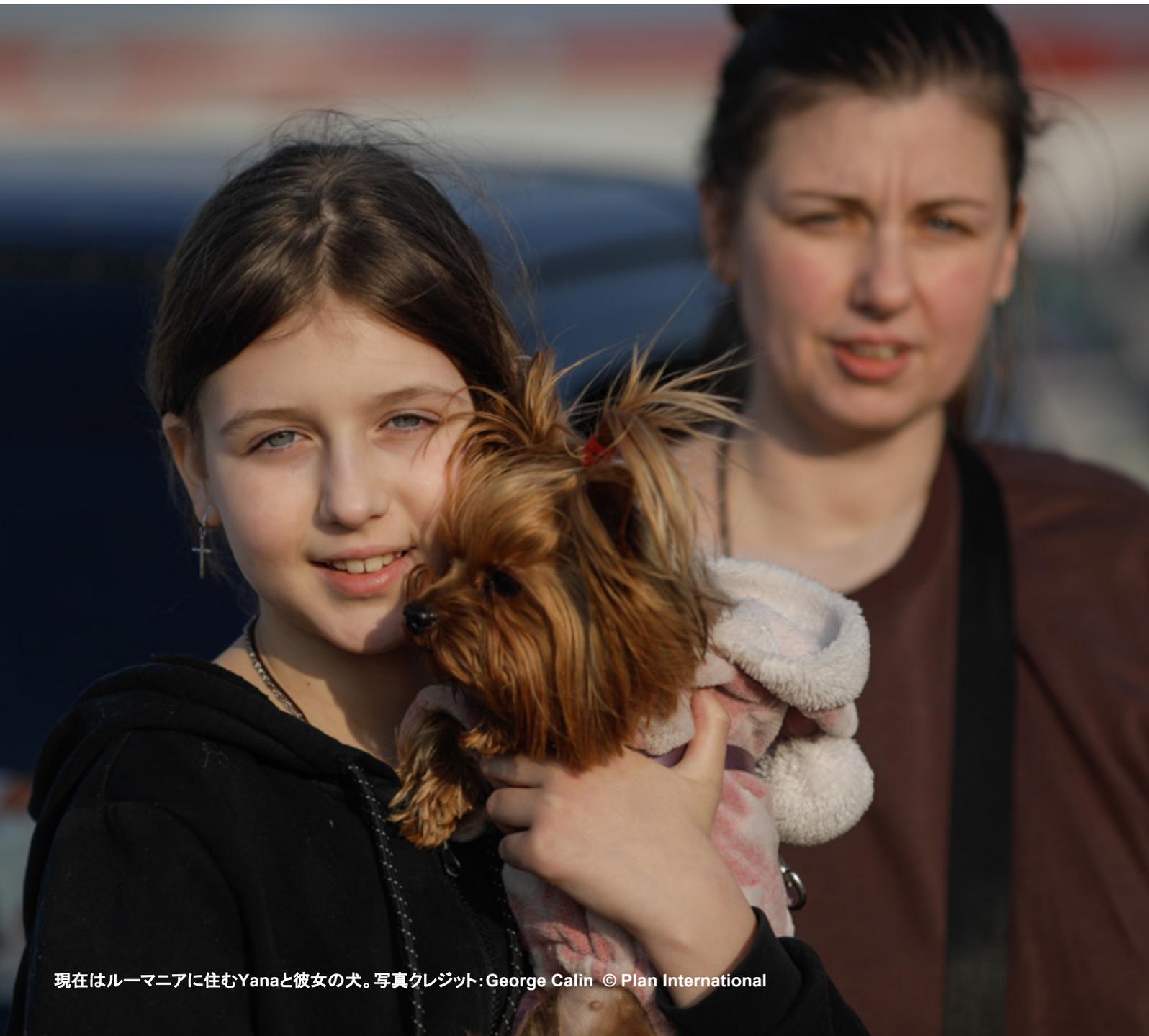
Mykhailo、男の子、15-19歳、ルーマニア

ウクライナのDanielaのように、未来のビジョンはヨーロッパの一部であるとする女の子もいた。

「数週間は祝うでしょう。もしかしたら2週間、3週間かもしれない。ずっと休日です。爆弾の音も聞こえない。私たちは恐れることなく、皆がその日のウクライナの勝利を祝うでしょう。近代的なヨーロッパ諸国の一員として祝うのです」

Daniela、女の子、10-14歳、ウクライナ

一方、利害関係者は、近隣諸国のウクライナ難民に対する関心や財政的支援の低下を予想している。ヨーロッパで暮らす難民家族にとって、特に就職や教育の機会を得るという点で、困難が増えると予想されている。



3. 結論と提言

3.1 結論

ウクライナの紛争は、思春期の女の子と男の子の**生活のあらゆる面**に影響を及ぼしている。

2022年2月に紛争が激化して以来、数多くの新たな課題に直面し、またジェンダー不平等やCOVID-19パンデミックの継続的な影響など、既存の問題も深刻化しているが、ウクライナ、ポーランド、ルーマニアで暮らす思春期の若者は、それでも決意とレジリエンスを持って、人生におけるこの特殊で複雑な局面を乗り越えようとしている。国際社会の多くが軍事援助に焦点を当てているため、紛争のジェンダー的影響、特にあらゆる多様性を持つ思春期の若者やユース女性への影響は、見過ごされ続けている。ウクライナの紛争に対する最初の報道と国際的な反応は大々的であったにもかかわらず、IDPsや難民への長期的な人道的影響への関心が低下するにつれ、この紛争とその影響は、忘れ去られた人道危機のひとつとなる危険性がある。

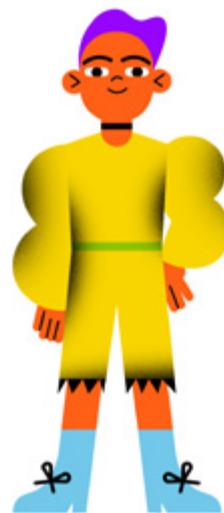
自身の生活や、自身の経験や機会へのアクセスを形づくる政策についての意思決定から排除されることが多く、この調査に参加した思春期の女の子は、危機がユースにどう影響しているかを認識していることを示した。**ウクライナの未来のための意思決定において、あらゆる多様性を持つ思春期の女の子と男の子の声と視点を中心に据えることによってのみ、復興は皆にとって平和で、よりジェンダー平等で、包摂的な社会につながるだろう。**



3.2 提言

以下の提言は、本調査に参加した思春期の女の子、男の子、その保護者、そして彼らを支援するために活動している主要な利害関係者から提起された主要な問題から引き出されたものである。

また、調査結果について話し合う検証ワークショップに参加したウクライナ、ポーランド、ルーマニアに暮らす思春期の女の子が策定した提言からも引用している。提言は、この調査の参加者が提起した優先事項を強調し、彼女たちの提案や変革の方向性を取り入れることを目的としている。



耐久性のある解決策

ウクライナ、ポーランド、ルーマニア

➤ 思春期の女の子への影響を含め、紛争の深刻な結果に対処し、それを打開するには、**長期的かつ現地に根ざした解決策の両方が必要**である。これには、社会サービス、ソーシャルワーカー、教師を支援することを目的とした取り組みを行なうことも含め、子どもの保護、教育、保健システムのレジリエンスを強化するために、国や地方自治体と協力をするドナーも含まれる。

けと長期的なMHPSSの介入策に資金を提供し、実施すべきである。特に思春期の男の子は、思春期の女の子とは異なる負の対処メカニズムに関与し、他の形態のオンライン暴力やリスクにさらされている。

➤ 国家保健当局は、ユースに焦点を当てた組織と協議し、MHPSSサービスに関する市民の意識を高め、思春期の若者がメンタルヘルス上の助けを求めることを非スティグマ化するために、ウクライナ語、ロシア語、ポーランド語、ルーマニア語による**広範なソーシャルメディア・キャンペーン**を実施すべきである。

メンタルヘルスとウェルビーイング



ウクライナ、ポーランド、ルーマニア

➤ 国と地方自治体は、ドナーの支援を受けて、思春期の若者とその保護者が**自由に利用できるMHPSSサービスを緊急に拡大**し、これらのサービスがウクライナ語とロシア語でも利用できるようにすべきだ。必要なMHPSSサービスには、個人および集団カウンセリングサービス、保護者とその子どもに圧力下での対処および子育て戦略を提供するプログラム、子ども・思春期の若者・ユースに配慮したスペース、遠隔地の地方に到達するための移動ユニット、コミュニティベースの社会的結束活動、思春期の若者が内密にアクセスできるオンラインまたは電話によるカウンセリングサービスなどが含まれる。

➤ 国や地方自治体は、ドナーの支援を受けて、思春期の女の子と男の子の両方に**的を絞った働きか**

教育と社会的結束



ウクライナ

➤ ウクライナの教育科学省と地方行政、そしてポーランドやルーマニアを含む受け入れ国の教育当局が、安全な場所での**対面式学習の再開**を優先させなければならない。

➤ 二国間、多国間、民間セクターのドナーによる支援は、認定防空壕と飲料水へのアクセスを備えた**損害を受けた学校の再建と改修**のために必要である。改修または再建される学校は全て、障害のある子どもが利用でき、その子どもを対象とした具体的な再統合戦略が必要である。

ポーランドとルーマニア

- 教育当局は、多言語・多文化クラスで教える教師の能力を強化するための支援と同様に、**追加の語学クラスや加速学習クラス**を提供するための教育政策を強化すべきである。

ウクライナ、ポーランド、ルーマニア

- 地方当局、特に子どもの保護を担当する当局は、影響を受けたユース集団を支援する地元のサービス提供者やNGOと協議しながら、対面式の学習や娯楽活動に参加していない**思春期の若者に目的を絞った働きかけ**を行うべきである。
- 地方教育当局は、国の教育省および地方教育サービス提供者の指導を受けながら、特に遠隔地で**顕著な学習損失に対処するための地域別戦略**を策定し、思春期の若者の社会化スキルと社会的結束を向上させるための対面活動を提供する必要がある。これには、ウクライナの学齢期の子どもがウクライナに戻った後、正規の教育制度に再統合できるようにするための移行措置の特定も含まれる。
- 国境を越えた学習を認識し、能力に基づいて国のカリキュラムを調整するためには、各国の教育省が**連携を強化する必要がある**。
- 国際ドナーおよび国家当局は、ウクライナ国内および受入国における社会的結束のための重要な基盤として、また受入国における統合努力を強化するための基盤として、**教育プログラムを支援し続ける必要がある**。

暴力からの保護

ウクライナ、ポーランド、ルーマニア

- 女性団体と協議しながら、地方自治体は、サービス提供者、警察、司法の能力を含め、GBVIに対する**サバイバー中心の対応に関する能力を高める必要がある**。ウクライナでは、最近批准されたイスタンブール条約を国や地方レベルで実施するあらゆるレベルの当局がこれに含まれる。



- GBVIに対処する公約の一環として、国家当局は**GBV予防をオンライン安全意識向上プログラムにまで拡大し**、思春期の女の子をオンラインや対面での性的搾取や虐待、人身売買の増大するリスクから守る必要がある。

ポーランドとルーマニア

- 国家当局が資金を提供し、サービス提供者が実施する**GBVサービスは、多言語で利用できる**ようにし、事例を報告しても難民の保護状況に影響を与えないことを明確に伝える必要がある。

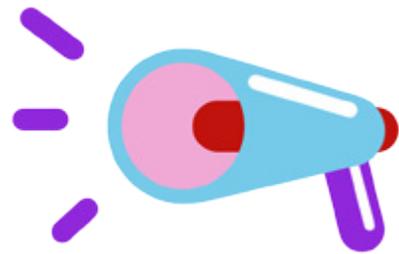
SRHRへのアクセス

ウクライナ、ポーランド、ルーマニア



- 国の保健・教育当局は、多言語による**CSEへのアクセス**と、オンライン、電話、ソーシャルメディア、対面でのSRHR情報への無料かつ秘密厳守の**アクセスを拡大**するプロジェクトを支援・開始すべきである。
- 教育当局は、**CSE**、尊重すべき人間関係、GBVの**予防**を、幼少期から学校教育課程の標準的な要素として**義務づける**べきである。
- 教育当局は、LGBTIQ+の生徒が健康であるために重要な性の健康情報を学べるようにするため、CSEが**性的指向や性自認も扱う**べきであるとともに、ジェンダー平等、性自認、性的指向について、包括的で尊重に満ちた会話を促進するようすべきである。CSEの授業は、思春期の若者、特に思春期の女の子に、オンラインまたは対面で性的搾取や虐待のリスクから身を守る方法についての情報を提供する機会でもある。

意思決定プロセスへの思春期の女の子の参加を支援



- ▶ 国際ドナー、国、地方当局、国際・国内市民社会は、あらゆる多様性を持つ思春期の女の子やユース女性を含め、ウクライナの紛争の影響を受けたユースに、**彼らの未来に影響を与え**、地方、国、国際レベルを含むウクライナに関するあらゆる意思決定プロセスに関わることができる**公式・非公式の機会**を提供すべきである。
- ▶ 国際ドナー、国や自治体、国際・国内市民社会は、ウクライナの未来に関わる問題について若い難民の意見を募るオンラインプラットフォームの開発などを通じて、あらゆる多様性を持つ思春期の女の子やユース女性を含む**ユース**、そして現在受け入れ国に住んでいる難民の**意見を定期的に求める**べきである。
- ▶ ウクライナ国内では、地方自治体は、**地元に基づいた参加型プロセスが障害のあるユースにも利用しやすく**、思春期の女の子を含め、IDPsや避難民でないユースにも開かれていることを保証すべきである。
- ▶ 国際的なドナーと国家当局は、女性やユース、特に思春期の女の子の意見を聞くための専用の協議メカニズムの設立を含め、あらゆる意思決定の場において**あらゆる多様性を持つ思春期の女の子とユース女性の直接参加**を促進すべきである。ロマ・コミュニティ、LGBTIQ+の人びと、障害のあるユースなど、最も疎外された人びとの参加も保証されなければならない。



巻末資料

- 1 「ウクライナ紛争の激化以降」とは、2014年に始まったウクライナでの紛争が激化した2022年2月以降の期間を指す。
- 2 OCHA, UNHCR (2024). Ukraine: Summary of the Humanitarian Needs and Response Plan and the Regional Refugee Response Plan (January 2024) - Ukraine | ReliefWeb
- 3 OHCHR (2024). Two-year update. Protection of civilians: impact of hostilities on civilians since 24 February 2022
- 4 OHCHR (2024). Two-year update. Protection of civilians: impact of hostilities on civilians since 24 February 2022
- 5 UNHCR (2023). “Refugee Population Statistics Database”, 24 October 2023, accessed 24 April 2024
- 6 UNHCR (2023). “Refugee Population Statistics Database”, 24 October 2023, accessed 24 April 2024
- 7 UNHCR (2024). “Situation Ukraine Refugee Situation” (unhcr.org), accessed 24 April 2024
- 8 UNHCR (2024). “Ukraine Refugee Situation Population Movements, Factsheet #1”
- 9 Save The Children (2022). The Experiences and Wellbeing of Children Fleeing Ukraine, November 2022
- 10 18～60歳の男性は兵役に召集される可能性があり、国外に出ることはできない。だが、ウクライナから出国できる場合もある。健康上の理由で兵役から外された男性や、一時的に兵役に適さない男性、障害を持つ男性は、必要な書類を所持している限り出国が許可される。VisitUkraine.today (2023). “Departure of men abroad in 2023: what has changed for military servicemen”
- 11 UNHCR (2024). “Ukraine Refugee Situation: Poland”, accessed 24 April 2024
- 12 紛争が激化して以来、ルーマニアはウクライナから逃れてきた多くの人が、ハンガリーやドイツなど他のヨーロッパ諸国に定住する前の通過点として利用されており、2022年2月以降、300万人以上の難民がルーマニアの国境を通過している。ウクライナからの難民約14万9,800人がルーマニアで一時保護登録されている。
- 13 UNHCR (2024). Regional Refugee Response for the Ukraine Situation
- 14 UNHCR (2024). Regional Refugee Response for the Ukraine Situation
- 15 UNICEF (2024). “Ukraine - Frontline children: battling mental trauma, underground”, press briefing, 23 February 2024
- 16 UNHCR (2024). Regional Refugee Response for the Ukraine Situation
- 17 Education in emergency: Save Schools website. Education in emergency (saveschools.in.ua), accessed 6 May 2024.
- 18 Plan International advocacy messages.
- 19 Humanitarian Needs and Response Plan – Plan International advocacy messages.
- 20 これは、参加者の募集が難航し、参加者が同じ地域に住んでいない場合があったこと、また、場所によっては対面でのデータ収集が参加者と調査者の双方にリスクが伴う可能性があり、安全保障上の懸念があったことなど、様々な要因が重なったためである。
- 21 ポーランドでの参加者募集は、思春期の女の子とその保護者の調査疲れなどもあり、全体的に困難を伴った。
- 22 ウクライナの南部と東部の最前線に近い地域では、全ての学校が閉鎖されたままであり、これらの地域に住む学齢期の子どもはオンライン学習しか利用できない。
- 23 Disability Rights International (2023). “Addressing the situation of children with disabilities in residential care as part of the Ukraine response”
- 24 ウクライナ政府は介護制度の改革を掲げ、家族ベースの介護を優先している: Government of Ukraine official portal (2023). “Ministry of Social Policy: Protection of the rights of Ukrainian children is a priority in cooperation between Ukraine and the European Union | Cabinet of Ministers of Ukraine”, (kmu.gov.ua)
- 25 CARE International (2023). Rapid Gender Analysis: Ukraine. October, 2023.
- 26 ソーシャルメディアアプリ
- 27 これは50/20プログラムに関してだ: Dopomoha.ro (2023). “Conditions of the new program”
- 28 CARE International (2023). Rapid Gender Analysis: Ukraine. October, 2023.
- 29 Human Rights Watch (2022). “Poland’s Constitutional Tribunal rolls back reproductive rights”, 22 October 2022
- 30 Aljazeera.com (2024). “Poland lawmakers take steps towards liberalising abortion laws”, 12 April 2024
- 31 The Wire (2022). “In Romania, Hard-Won Abortion Rights Are Being Systematically Undermined”, 20 January 2022.
- 32 ルーマニア労働法によれば、一般的に人は16歳で法的労働能力を取得する。International Labour Organization, Labour code of Romania, <https://www.ilo.org/dyn/travail/docs/1630/>



Until we are all equal

謝辞

本報告書は、Scruples Research によるデータ収集と分析に基づき、プラン・インターナショナルが作成し、Jenny Rivett が編集した。本報告書は、プラン・インターナショナル東・中央ヨーロッパの委託を受け、以下のプラン・インターナショナルの事務所が寄稿した：プラン・インターナショナル・ウクライナ、プラン・インターナショナル・ポーランド、プラン・インターナショナル・ルーマニア。そして調査対象3カ国におけるプラン・インターナショナルのパートナー：ウクライナの**Slavic Heart**と**Ruki Druziv**、ポーランドの**Polish Humanitarian Action (PAH)**、ルーマニアの**Fundația Națională pentru Tineret (FNT)**。

調査に参加してくれた思春期の女の子と男の子、その保護者、NGOやCSOの職員に感謝したい。彼らの貢献なしには、この調査は不可能であった。

また、Louise Allen、Lawson Brunnock、Yeliena Dudko、Marianne Rowley、Sven Coppens、Camila Mariño、Aya Saeed、Natalia Baitemirova、Dominika Cichocka、Angelisa Diveny、Kristine Anderson、Anna MacSwanの貢献に特に感謝する、Rilian Agunos、Dr Lucia Rost、Dr Jacqueline Gallinetti、Kathleen Sherwin、Enzo Tabet Cruz、Lindsey Hutchinson、Maureen Fordham教授、そして文献レビューに協力してくれたキエフ・モヒラ・アカデミーの社会科学専攻の学生。

表紙の写真：ウクライナのIDPのための宿泊センターで暮らす姉妹と友人。

写真クレジット：Albina Vinar © Plan International

イラスト：[Zhenya Oliiynk](#)

デザイン：[Amy Reinecke](#)

コピーエディター：Anna Brown

プラン・インターナショナルについて

国際NGOプラン・インターナショナルは、誰もが平等で公正な世界を実現するために、子どもや若者、さまざまなステークホルダーとともに活動しています。子どもや女の子たちが直面している不平等を生む原因を明らかにし、その解決にむけ取り組んでいます。子どもたちが生まれてから大人になるまで寄り添い、自らの力で困難や逆境を乗り越えることができるよう支援します。

誰もが平等な世界の実現にむけて、
歩みを止めずに進んでいきます。

Plan International

International Headquarters Dukes Court,
Duke Street, Woking,
Surrey GU21 5BH, United Kingdom

Tel: +44 (0) 1483 755155

Fax: +44 (0) 1483 756505

E-mail: info@plan-international.org

plan-international.org

Plan International East and Central Europe

Published in 2024. Text © Plan International



facebook.com/planinternational



x.com/planglobal



instagram.com/planinternational



linkedin.com/company/plan-international



youtube.com/user/planinternationaltv